

---

# 初音ミクの奔走

SNEO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

初音ミクの奔走

### 【Zコード】

Z92631

### 【作者名】

SNEO

### 【あらすじ】

ボーカル：ケイ（楽器の出来ないボーカル）  
ピアノ：トオル（全体音感を持つピアノ）  
ギター：ダイ（売れないバンドのギターボーカル）

思いつきのように結成したバンド。

そして思いつきのように解散したバンド。

彼らは思い思いに奔走する。

## エピース

スタジオには絶えず音楽が流れている。彼らの音楽もまた、そこから始まつた。

ドラムは軽快な音を奏でる。ひとしきりでたらめなリズムを叩き終えると、ケイは満足そうに呟つた。

「こんなのがいい?」

長い前髪をうつとおしゃうにかきあげる。染色された前髪の聞から、くつきりとした一重の目があらわれる。まばたきを数回する。

ピアノを弾いていたトオルは、軽快な指の動きを即座に止めて、「デタラメすぎ。ねーよ」と笑つてみせる。

その間、黙々とギターを鳴らし続けていたダイは、我関せずといった様子。

トオルは、ダイの方を見て、「うつせw」

と一言。ダイは苦笑いを浮かべ、首をふらふらと横に振つた。まるで首のすわつていな子供のようなこの動作は、彼の癖であり、ダイを除ぐ二人はいつもそれをからかう。

ドラムに飽きたケイは、ふらふらとトオルに近づいた。

「とおるちゃん、いけそつ?」

トオルは少し考えると、ケイの方を見て、「解散だなwww」

と漏らした。

## 【ケイ】リクルートボーイ

「当社の志望度は100%でこいつと並んでいいですか？」

「43%です」

表情一つ変えずにケイは言い放った。

「低いね。じゃあ何で受けたの？」

「業種を広告にしたら、たまたま引っかかつただけですが、いけませんか」

面接官は30手前に見える。毛も薄く、たよりなさそうだが、面接官というだけで学生にとっては、脅威に値する。

「いけなくはないんだよ、でもさあ、それを正直に言われちゃうと落とさざるを得ないから…」

ケイは少し口を尖らせて数秒考えた。面接官は、ケイの表情から、その内心を探るうとして、諦め、結局は投げやりな態度に移行した。  
「他に質問とかないですか？」

「ふむ」

右手を唇にあてて、顔を前に傾ける。ケイが考え方をする時にとるポーズだ。彼は、困ったときには眉を寄せ、首を12度ほど右に傾けるとか、手を振るときは決まって手の甲を見せるとか、そのような細かなルールにのつとつて生活している。やうしなければいけない理由はどこにもない。しかし、彼にとつてこれは非常に重要なことであつたし、それをアイデンティティとして捉えている節もあつた。

頭の中で、ブイーンというモーターの回転音をイメージする。どんなに思考しても、物理的にみて脳は決して回転はしない。脳細胞の温度が上昇することはありますとも。

彼がイメージするのはあくまで象徴的なところである。

「なぜあなたは多くの企業の中から、御社を選んで入社されたんですか？」

隣の部屋から、わずかに学生の話す声が聞こえる。今ケイがいるのは、おそらくこの会社の打ち合わせスペースのよつなところであり、厳密にいうとプライバシーの保護においては完璧ではない。意識を集中させれば隣の会話を全て拾い集めることもできる。それは、魚の小骨を箸で一本一本抜くような作業であり、彼はこれが大嫌いだった。

「僕がこの会社を選んだのは、やつぱり人だな。就職活動で出会った面接官は皆優しかったからね」

「それは、人事にも学生を集めなければいけないというノルマがあるからじゃないですか」

スペースの空気が僅かに歪む。ケイはそれに気付くと、

「いや、別に人がいいというのを否定しているわけではないんです。ただあなたが学生のとき、そんな風には考えなかつたのかな、と思つただけです」

フォローしたつもりが、余計に深みにはまつているのを肌が感じる。脇に嫌な汗が滲む。

「そんな風に人を疑つていたら、先に進まないからね  
ああ、怒らせてしまつたな。ちょっと面倒になつてきた。

「先に進むためならある程度の犠牲はいとわない。それがあなたの人生においてとても大事なものであつても。バイ俺。それでは」

ケイは真っ黒なコートを椅子の背もたれからひつたくると、倒れた鞄を掴み、さつそつと出て行つた。誰も追つて来ない。追われてもいないのに、逃げるんだな、俺は。

## 【ダイ】ライブアティクト

ギターのコードを順番に拾っていく。それは決して難しいことではない。そうして最も分かりやすい形の音楽を作り上げる。芸術には必ず二つの形がある。一つは、天才的な閃きや発想で今までにないものを生み出すもの。そしてもう一つは、今までにあるものをブラッシュアップするもの。どちらが優れているというわけではない。ただそのような系統があり、ダイの場合は、後者にあたる。

髪は雑誌で流行っていると書かれていたアシンメトリー（左右不对称）にカットしてある。服は、雑誌に載っていたアメカジの廉価版だ。いつもポケットに手をつつこんで首を揺らしている。

彼の最も厄介なところは、一般的でありたいと思う傍ら、自分のアイデンティティを強く持ちたいと望んでいる。集団でありながら、孤独を願う。しかし、これは決しておかしいことではない。誰だってそうだ。他人と違うのは嫌だし、他人と同じなのも嫌。彼もまた、そんな一般的な感覚を持ち合わせているといつても過言ではない。とにかく、彼は正統派のバンドマンなのだ。一般的に共感しうる恋の歌詞を書き、また聞きやすいどこにでもある曲をつくる。

「えー、どうも、大阪で活動しているハイスクールブランドです。みなさん略してハイブラと呼んでください！」

それなりのレスポンスが返ってきて来る。観客は、20人くらいか。よく集まつたほうだ。その中には知人が、

15人くらいいるわけだが。

「えー、なんだろ？ 盛り上がってるかいっ！」

キーン。

ハウリングで語尾が飛んだが、観客は手をあげて応える。友人かの彼の評価は概ねいい。いや、一般的には高いと言つても問題ないくらいだ。

「じゃあ次の曲は、今、悩んでいる人に聴いてもらいたい曲です。曲名は、『光』お願いします！！」

ドラムソロで始まった曲は、次に、ボーカルとともにギターが響く。必要以上のボリュームでライブハウスは細かな振動に襲われる。そんなとき、彼は強烈なエクスターを感じるのだ。

観客は、なおも体を揺らし続ける。

「アマチュアバンドとしては、テクニックはすごいな。でも、もううんざりだ。出よう」

後方でパーカーをかぶつて曲を聴いていた青年は、耳にかかつた髪を一度かきあげて、気だるそうにライブハウスを出た。

## 【トオル】孤高のピアノマン

まだ、耳がキンとしてる。何で日本のライブハウスってのはこんなに音量上げるんだる。まあ外国のライブハウスなんか知らないけど。

「トオル、まだ途中だぞ。最後まで見てけよ」

「すいません。ちょっと腹痛くなつて」

わざとらしく腹をさすりながら作り笑いを浮かべる。

バンドの先輩に、友達が出るから来いって言われてきたが、ほんと時間の無駄だな。

と心の中でつぶやく。ライブハウスの熱氣で忘れていたが、テールードのジャケットだけではこの寒さには耐えられない。灰色の空と、後方で聞こえるやかましい音。きっと音楽が好きとか、自分のことを認めてほしいって気持ちが空気を震わせてるんだろう。

「またそれか。今度のライブまでに3曲は作ってもらわないといけないんだから。いい起爆剤になるかと思つたんだが」

先輩は髪をかきむしりながら話す。その耳には大きなピアスがついている。

この人の少し鼻にかかる声は嫌いじゃない。  
でも、残念ながら好きでもないんだな。

「作りますよ。てゆうかいつも作ってるじゃないですか」

トオルは瞬きもせず応える。白い息が高く空に吸い込まれる。ドラムの刻むリズムが先輩の「一トのファー」を揺らす。

「お前の作る曲好きだよ。爽やかで、疾走感がある。ただ次はもつとフックのあるやつが欲しいな。周りにあるもの全部に喧嘩売るようなやつ」

そんな曲は先輩の声には似合わない。第一、声量が足りないだろ。

「喧嘩…ですか。したことないですね」

トオルは丸く猫のような目を閉じて言う。かじかんだ手をポケッ

トにつつこむ。

「まあとにかくピアノ、弾きたいんで、帰つてもいいですか」

黒のオールスターの爪先が、地下鉄の駅に向く。渴いたアスファルトがそれに呼応するように、鋭い小石の摩擦音を生む。

「おお、そんじゃ、頼むぞ、トラックメイカー」

「うひっす」

言われなくとも、自分の音は自分で作るさ。感情と同じで、誰にも深いところは見せないままで。

## 【ケイ】ダストメイカー

気晴らしにマフラーを買った。カラスみたいに真っ黒なやつだ。2月か。夏には家の近くの田んぼをコウモリたちが不気味に飛び交う。その姿は、子供の頃には蝶に見えていた。今では、なんだろう、普通にコウモリかな。

大学に入るまでは、パソコンなんか持つてもいなかつたのに、今ではテレビはつけずに、パソコンの前に座っていることが多い。何をするでもなく、ネットをぼんやりと眺めている。

高校生の頃、よくなつた気持ちだ。一言で言つと、焦燥感。それも自分に対して、だ。

何かしなくちゃいけない。高校の頃は、勉強だった。でも怠惰な自分はそれを後回しにして、結局1日を無駄に使う。それで夕暮れになつて妙に焦つて、でも、何もしなくて。そうやって1日が、1週間が、1年が過ぎていった。

結局、受験ぎりぎりで何とか頑張つて、ランク落とした大学には進学できたが、悔いが残つた。今でもそんな生活を続けている。

そんな自分を変えたくて、就職先は銀行や金融主体の大学でありながら、広告業界を選んで、既に40社ほど面接を受けている。もつとすごいやつはいくらでもいるだろうが、自分の周囲じゃ就職活動をここまでやつてゐるやつはない。それに内々定は既に一つ貰つてゐる。

就職活動は、希望と挫折の連続だ。認められて飛び跳ねるほど嬉しかつたり、自分を全否定されたような気持ちになつたり。そんなとき、いつもこれは通過点と自分を落ち着かせる。

子供の頃から、絵が上手かつた。ずっと上手いと言われ続けて、調子に乗つて最近通信教育まで始めた。でも、始めてみて分かつた。自分が井の中の蛙だつてことを。きっと才能はあつただろう。でも、もうやる気もしない。そつやつて昔から何でも半端だつてことは分

かっているが、どうしても上手くいかない。

もう一つ、半端なことをしている。

今、パソコンを立ち上げて、ワードを開いて、文章を打つ。傍らには携帯電話を置く。

頭に浮かんだ言葉とメロディを携帯電話で録音する。そして思つままに、その言葉をパソコンに打ち込んでいく。これは、Aメロ、それで、次はBメロ。サビはこのメロディにしよう。いや、歌詞にしては盛り上がりがイマイチだから、これにしよう。

とか。そんな風にして、1時間くらい過ごす。それが何かになるわけでもない。楽器は一つも弾けない。楽譜も読めない。高校の音楽の授業で欠点取ったこともある。

でも、歌は好きだった。だから、ひとつしてオリジナルの曲を作るのは楽しい。

ひとつして作り貯めた曲の中にはメロディを忘れて、そのまま消してしまうものもあるが、自分で完成している曲はすでに10曲くらいある。この全ては、いずれパソコンのハードディスクと一緒に捨てられてしまう。

しかし本当に感覚的な話だが、この曲はいずれどこかで世に出る機会があるはずだ、となんとなく思う時がある。

突然、パソコンがブーン、とパソコンのよつた音を立てる。

ハードディスクが壊れるのも時間の問題かも、な。

## 【ダイ】スペイラルドッグ

最近買つたバッショ。それに背中のギターケース。俺はライブしたんだぞー。してたんだぞー。って高揚感が多分にある。

「ダイ、今日の、よかつたなー。あの3曲目の中に入れたフェイクとか」

「ああ、あれな。何となく入れてみた」

嘘をついた。大好きなバンドB.O.Cがやつてたフェイクを真似ただけ。でも誰かが困る嘘じゃない。そうやってモラルは少しづつ欠如していくよに思われる。それは少しずつ、シロアリのように、いずれ壊滅的な打撃を与えるものになるかもしれない。そんな危惧は昔からあった。

でも例えば、歯磨きをしなければ、虫歯になるかもれない。そう言われて、必死に歯磨きをしたことはなかつたろう。いつも、気付くのはそうなつてからだ。

ダイはそれでいいと思っている。必要以上に注意深くある必要はない。

「それにしても、アッショウの仲田さん、途中で帰っちゃつたな」

横を自転車が通り過ぎる。暗くてよく見えないが、緑の折りたたみ自転車。それを目で追つていると、田の前に陸橋がある。その横には線路があり、下には三級河川が流れる。遠くを見ると、いくつもの小さな光が見える。近くから煙が出ているものもある。光化学スモックを連想させる夜景。

「仲田さんて、ボーカルの、髪の人？」

ダイは首をゆっくりと振つて、隣にいるベースの小川に尋ねる。

小川はすれてきたギタークリーナーの肩紐をゆすつて元の位置に戻して、「そうそう、前に飲み会で会つて、その時に番号教えてもらつたんだ。で、今日のライブ誘つたら来てくれるって。で、後ろの方で見

てたよ」

「ふーん。途中で帰つたってことはあんまりだつたのかな」「や、なんか一緒にいた黒髪の、多分俺らと同じ年くらいのヤツが途中で帰つたからそいつ追つかけたんじゃない」

小川の推測に、ドラムの坂下が横槍を入れる。

「その黒髪つて、猫目だった?」

横を特急電車が通過する。陸橋に大きな振動が伝わる。会話が途切れる。ダイは、前からランニングをしてくる若者を避けた。

「坂下、知ってるの?」

電車は通り過ぎ、ランニングシューズと地面が当たる音だけが小気味よく聞こえる。ダイは左手の人差し指の腹に出来たマメを親指で確かめながら言った。

「ああ、多分、アッシュの助つ人メンバーで出でぐるやつだよ。目立たない地味なやつだけど、ピアノは上手いんだよ。でも他のメンバーとは少し毛色が違うようだから、なんかいつも浮いてて、やら印象的なんだよな」

ピアノか。ピアノと一緒に演奏したことないな。というか、いつも同じメンバーとばかりやつてるからな、俺。まあそれはそれでいいんだけど、でもたまには他の人とやってみたいか。いや、まあいいか。

「俺、自転車止めてるから」

しばらく行って、ダイはメンバーと別れる。耳にイヤホンを入れ、BOCの曲を流す。勢い欲自転車のペダルを漕ぎ出して、流れる曲にハミングを乗せる。

就職活動は順調だ。バンドも順調。さて、俺はどうしたい。音楽で生きてていきたいが、それも今すぐにつていうのは難しそうだ。とりあえず就職するべきか。せずに音楽に賭けるか。

いつも答えの決まった自問自答を繰り返す。

なわぱりを確認する犬のようだ。

## 【トオル】ピックギフト

電気の点いてない、寒い部屋は人を少しだけ憂鬱にする。天井にひつたてんとう虫のような丸い蛍光灯。そこから垂れ下がったクモの糸。トオルは迷いなくそれを引っ張る。2、3度瞬いて、電気が点く。糸にはボランティアをしていたころのHODカードが結び付けられている。入学当時、外国に行けるという理由で入ったボランティア部。そこで、今の彼女と出会い、そこそこ楽しかったように思う。

本棚には、家族の写真が飾つてある。年寄り臭いと馬鹿にされることも多いけど、家族と仲いいんだね、と彼女が微笑んだのを思い出す。

テーラードを脱ぐと、ヤカンのお茶をコップに注ぎ、一気に飲み干す。

しまった。うがいしない。

急いで、洗面所に行き、うがいをして、コンタクトをはずす。やつと外から解放されたんだと思い、真っ白なベッドに顔から飛び込む。大きく息を吐き、今度は吸つてみる。埃っぽい空気が肺に流れ込むのがわかる。

部屋の真ん中に配したコタツが畳に飛び込んでくる。

コタツ、つけようかな。コタツには、剥いたまま忘れてしまったみかんの皮と、ノートパソコン、飲みかけのサイダーが置いてある。ずぼらだな、ほんと。

トオルはむくっと起き上がると、コタツのスイッチを入れた。そのままコタツには入らずに、壁に隣接して置かれたピアノのイスに腰掛ける。20万円くらいのピアノだ。高校生の頃に、親に無理を言って買つてもらったのを未だに使っている。

ドの音を鳴らす。そのまま流れるように、2音高くし、次は半音落とす。考える前に指が次の鍵盤を抑える。足元のペダルも、感情

のままに踏む。楽譜は置いているが、見たことはない。せいぜい一音田を確認するくらいだ。

大好きなアニメ映画の主題歌。壮大なオーケストラから、静かな音へ。それぞれの楽器の特性を活かしたソロパートに移行し、少しずつ全体が組み合わさっていく。それらが全て合致したとき、初めに壮大だと思っていたパートは、序幕にすぎないことがすぐに分かる。力強く、多彩で、大きな森や、海、空をイメージさせる。様々な生物の声が風に乗って大地へ降り注ぐ。そしてやがて風は大きな谷の間にもぐりこみ、そこに咲く小さな一輪の花を揺らす。花は一度、可憐にその身をくねらせると、控えめでいて、甘い香りを残す。やがてその香りは静かに消えていくのだ。

トオルはそんなことを想像しながら、ベースとなるピアノパートを弾く。

彼がピアノを真剣に始めたのは、中学に入つてすぐの頃だった。実家は農家だつたが、なぜカリビングにはピアノが置いてあり、それはいつもトオルの玩具だつた。中学に入ったトオルは、家のピアノを毎日のように弾いていた。別にプロになろうとか、誰かに習おうなんて気はさらさらなかつたし、両親もそのつもりは微塵もなかつた。ただ、彼は人が歌を歌うように自然に頭の中のメロディをピアノで弾くことが出来た。それは彼の相対音感という才能に起因するものであることは後になつてから知つた。聴いた曲をすぐに弾けることなど、皆出来ることだと思つていたくらいだからだ。

それが特異なことであると、大学生になつてから知つた。それで別段得をしたということはないが、ピアノが弾けるということを知つた友人が、今のバンドの先輩を紹介してくれて、自然と曲を作り始めた。

いつしか彼は、バンド用の曲と自分のための曲を作りわけるようになつた。それが何かにつながるわけでもないが、いい加減、自分の曲を誰かが適当に我が物顔で歌うことには辟易していた。

しかし、彼はいつか自分の作ったこの曲が、自分のものとして、世に出て行く、そんな気がしていた。いや、正確にはそうでないといけないのだと思っていた。

## 【ケイ】フローティング1

突然携帯電話が鳴った。

「R社人事の高岡だけど、覚えてる?」

「ああ、高岡さん、突然どうしたんですか?」

「落としとして悪いんだけど、今度飲み会やる」とになつたんだけ  
ど、お前、幹事やつてくれないか」

「うーん、嫌です」

「うん、だろうな。幹事はもう既に他のヤツに頼んでるんだ」

「…高岡さん、変わらないですね」

「当たり前だろ、就活生じゃあるまいし、そつ短期間では変わらん  
さ。変わる気もないしな」

「はあ。それで飲み会って何の飲み会ですか」

「聞きたい?」

「や、いいです」

「相変わらずだな。3月1~5日にやるからあけといて」

「それ、来週ですね。あ、でもあいてるな。わかりました」

「おう、よろしく」

とすぐに電話を切られた。なんか嵐のような人だな。ケイは口に  
くわえた歯ブラシを抜き、口内からあふれ出そうな泡を吐き出しに、  
洗面所へ向かつた。

待ち合わせの時間は8時だったが、その少し前に着いた。そこには既に数人の男女がいる。見た目からすると、同年代かな。グレー  
のジャケットを着た男が、ケイを見て手を振る。それに気付き、  
周りにいた人もケイに目を向ける。とりあえず、そちらに寄つてい  
くと、

「木本君も来るとは思わなかつたよ。なんかこつこつ馴れ合いみたい  
いの嫌いそうだし」

「ああ、まあ遠からず近からず。とにかくで、誰だっけ、見覚えあるけど」

「はは。確かに木本君と違つて僕は目立たないからね。古川です。面接で一緒だつたる。あと、阿部君も来るんだよ。それに久居さんも同じだつたの覚えてる?」

古川は、少し横にのいて振り返り、後ろにいた小さな女性に目をやる。

「久しふり」

遠慮がち彼女はケイに頭を下げる。フリルのついたワンピースに、カーキ色のカーディガン。腕には、カラフルなミサンガみたいなものをつけている。

「ああ、髪が明るくなつたからわからなかつたよ、久しふり」

「もう内々定もらつたから、髪染めたの。似合つ?」

「終わつたからつて髪染めるつてのが安易だね。黒のがよかつたかも」

あ、また本音言つちゃつた。

大通りを走る車のヘッドライトが目に飛び込んで少しづしい。目を細めると、苦笑する久居がいた。

「や、ほんと、嘘つくの苦手なんだよね、木本君は。面接の時もそうだつたからさ、変わつた人がいるなつて思つてたんだよ。なんか自分を持つてゐるつてのかな、憧れるよね」

フォローするよう多くの言葉を発する阿部が道化師のように見える。端の方で見慣れない女性がケイを見ている。その視線には明らかな敵意が感じられる。真つ直ぐに降りた髪は、肩よりやや上で不安定に揺れる。ほとんど化粧をしていないように見えるが、綺麗な顔立ちをしている。プライドが高そうな上がつた目じりと、白い肌が何より印象的だ。堅く結んだ唇が、突然開く。

「嘘が苦手ならしゃべらなきゃいい。デリカシーのかけらもないのね」

「下らないだろ。人に氣を使って生きてくんくて。メリットが無い

なら、俺はそんなことしたくない、それだけだよ。それに嘘ついてまで友達を作らうとするやつの気がしれない」

「あー、またやっちゃんたな。雰囲気悪い。もう帰りたいな。

「江美、やめなよ。本木君の言つことももつともだよ。別に悪口言つたわけじゃないんだから。『ごめんね、本木君』

そう言つて、彼女を止めようと肩を抑えたのは、ロングの女性だつた。大人しく目立たない顔だが、鼻筋は通つていて、何より真つ直ぐな目をしていた。

「別にあんたが悪いわけじゃないから、氣を使つなよ。俺も少し言い過ぎた。『ごめんな、久居』

久居は首を振つて、大丈夫、ありがとうと言つて、なぜかガムをくれた。

「皆が騒いでるからでにくかつたんだか」

そう言つて、黒のロングコートを来た男が現れた。

「あ、阿部君」

古川は、ほつとしたように言つた。阿部はケイを一瞥すると、

「お前、ほんとトラブルメーカーな」

「ほつとけ。160センチにロングコートは似合わんから、やめとけ」

さつきの女性は未だに睨んでいる。そして隣では、気まずそうに彼女の肩を触る女がいる。

「高岡さんは少し遅れるらしいから先に店入るわ」

たむろしていた学生達は阿部に続いて歩いていく。

「古川君、さつきは悪かつたね、フォローしてもらつて」

道中、特に話すやつもいなかつたので、古川に声をかけた。

「や、いいんだよ。本木君が悪いわけじゃないし。フォローになつてなかつたかもだけど」

「まあ、なつてなかつたな」

「ほんとストレートだね」

「ところで、今回の飲み会の主催って知つてる?」

「え、聞いてないの？なんか高岡さんが面接した学生の近況報告兼ねじぎつぐばらんに飲もう、みたいな感じらしいよ。ああ、あそこ

の水木明日香ちゃんだけ、さっき揉めてた東江美ちゃんのルームメイトらしく社会人らしいけどね」

ふうん、水木明日香。しつかりしてそうだとは思ったけど、年上

だったのか。

相変わらずヘッドライターの明かりが眩しく目にに入る。

## 【ケイ】フローティング2

「大体あーゆータイプって嫌いなんだよね」

と江美が言つ。隣で聞いていた明日香は、いつものようになだめる。近くにいた阿部が、好奇心から質問をする。

「なんで嫌いなの？面白いじゃん、アイツ」

店に続く階段を上りながら、江美は、阿部のほうを睨んだ。先ほど怒りが収まらないと見える。

顔のまんま強気な子だな。阿部はそんな風に思いながら彼女の言葉を待つ。

「面接のときだって、私隣にいたけど、グループワークなのに、自分だけがしゃべって。声が大きいから丸聞こえよ。自分がアピールできればいいと思つてるのよ」

「はは、周りから見たらそう見えるんだ。まあ確かにアイツは声でかいし、意外によく喋る。それに自分の意思やポリシーみたいなものを強く持つてるから、我を通すように見えるけど、実際はそんなことないよ」

自動ドアが開き、店員が威勢よく声を出す。阿部は手際よく入店の手続きをすませ、皆を中へ入れる。座敷に通されると、とりあえず生ビールをピッチャードで注文し、いくつかウーロン茶も運ばれてきた。

「さっきの話、納得いかないんだけど。発表もアイツがしてたじゃん。アピール小僧だからでしょ」

男女が適当に座つたため、阿部の隣に来た江美が聞く。阿部はちらと周囲を見て、ケイが近くにいないのを確認して、

「あのときは、初めてグループワークしたヤツが多かつたから、わざとアイツが喋つたんだよ。制限時間もあるしね、積極的にしゃべらない人はビジネスでは取り残されるんだから、それをわざわざ捨つ必要はないって考えもあるらしいけど。それもグループワークで

は協調性が評価されるつてことを知った上でやつてゐるらしい。それに、アイツには周囲を巻き込む天性の才能があるよう思つよ」

「買いかぶりすぎじゃない？」

テーブルに置かれたピッチャーの結露をおしごりで拭き、コップをビールで満たす。阿部がしきつて乾杯をする。

「確かにアイツしかしゃべらなかつたけど、実は最終的な結論は、少しづつ出した皆の意見がまんべんなく反映されたものだつたんだよ」

「でも、皆がもつと喋つてれば、もつといい結果が出てたかも」

「それはまあ、確かにそうかもしないけど、あいつが想定してるのは面接じゃなくて、実際のビジネスシーンなんだよ。そういうやつなんだよ」

「コップに注がれたビールに口をつけ、コップを置くと、江美は大きくため息をついて、

「はた迷惑なやつね、それ」

「まあ、でも結果的に、うちのグループメンバーは全員受かつたんだよ。きつとアイツがいなきゃ、その結果はありえなかつたろうよ」

ケイがトイレから戻り、阿部の前に座る。江美はケイの顔をまじまじと眺め、フンと鼻を鳴らす。

「何、俺の悪口か」

「まあ、そんなところだよ。天才と馬鹿は紙一重つて話だ。それよりバンドの話はどうなつた?」

「バンド? 何の話だつけ?」

ケイは革のジャケットを脱ぎながら聞いた。

「おい、お前が言い出したんだろ、バンドやろうつて」

「ああ、そつだつけか。じゃあやうひ。何が弾ける?・ギター?・ドラム?」

「や、なんにも。歌うだけ」

「じゃやめにしよう」

ビールをぐいと飲み干した阿部は、

「結論早いな」

とつっこむ。江美の隣でそれを聞いていた明日香は、苦笑し、「ケイ君は何か楽器できるの？」

と聞いた。ケイは明日香の顔を見る。その表情はどこか、母性のようなものを感じさせる落ち着いたものだった。隣に座る江美が妹のように見える。ニットのセーターは首を半分以上隠している。そこからわずかに、赤い痣が見える。不意に浮かんだ言葉がすっと口から出る。

「キスマーク？」

店の照明は少し明るすぎた。長テーブルには3灯の照明があり、木製のテーブルに過度の照り返しを見せてている。BGMは90年代のポップスのように思うが、知っている曲は少ない。

「やだ、違うよ」

それ以上言い訳をしないのは、やましいことがないから、それとも、嘘がつけなかつたから？

沈黙の中を古いメロディが通り抜ける。先ほどから江美は背中を壁につけ、もたれた体勢で、ビールを飲み続けている。

「何も弾けないよ。だからやるとしたら、ボーカルしかないから、阿部とじや組めないな」

沈黙の気まずさから、ケイは口を開いた。そして、ぬるいビールを飲む。ピッチャードの結露で、テーブルが少し濡れている。

「ギターとか友達にいないの？ピアノなら私、少しは出来るけど」「いないな。阿部は？」

「俺も右に同じ」

ピアノ、弾けるのか。まだアルコールの回っていない脳が、先ほどの明日香の言葉を回想する。その瞬間、ふと思い出した。

「あ、いる。ギター弾けるやつ。ただ、そいつの名前、

セクシーKつて言つんだ」

## 【ケイ】（スピノオフ）セクシーK（前書き）

本編とはほぼ無関係ストーリーです。面倒な方は読み飛ばしても、まあまあ問題ないです。

## 【ケイ】（スピノオフ）セクシーK

ケイが大学に入り、初めて話したのは、身長の高い傲慢な男だつた。なぜ話しかけられたかも、なぜ一緒にいたのかもわからない。ただ、そりが合わずにはいつとはすぐに話さなくなつた。

そいつと話さなくなつて、気付いたことがある。大学の入学当初というのはとても大事な時期でそれを逃すと、友人は出来ず、孤立してしまうということ。ケイは大学において完全に孤立していた。人見知りだつたし、社交的でもなかつた。

大学での沈黙は少しづつ、ケイの心を侵食し始める。

気付いた時、ケイは、中国人留学生の集団にまぎれていた。文化も価値観も大きく異なる集団。それに年齢も皆、年上だつた。日本語学校を卒業して、大学に入学した者が大半だつたからだ。

いつも6人くらいでいるのだが、その中の王という学生に、「読みは、オウなの？それともワン？」と訪ねたことがある。彼は、人懐こい笑みを浮かべ、

「どっちでもいいよ。そんなの気にしないから」

と言つた。しかしその直後の授業で、講師にワン君と呼ばれ、厳しい表情で、

「オウです。間違えないでください」

と挙手したのには驚いた。というか、俺の「コーヒー返せwww

夏になると、ケイの沈黙とは裏腹に、蝉は騒がしく鳴いた。王は額の汗を拭きながら、

「おいしそうだな、蝉」

と遠い目をしていた。ケイも同様に遠い目をして、もう、アカンと思った。

そんなときに、出会つたのが、吉野慶介だつた。強い癖毛が傷んで、波打つており、いつも褪せたジーパンを履いている。目は常にうつろで、口も半開き。ちょうどポストのような状態であつた。岡

山詠りがきつく、やたらと顎をなでる癖のある男だった。彼は、

「お前、なんか部活入つとる?」

と唐突にケイに訪ねた。ケイは、不信感を露骨に出して、

「いや、それが何か

と横目に答えた。

「…しかし、トムにとつてそれはどうでもよい」とでした。それを  
見たナンシーは…」

講師に和訳を求められた、女子は、すんなりとそれに応える。

「や、実は俺、準硬式野球部に所属してるんやけど、部員がおらん  
のんよ。で、入ってくれんのんかな、と思って」

「あ、そう。普通、そういうのつて野球経験とか聞くもんじやない  
の?」

「ああ、すまん。でも、初心者でも全然問題ねえよ。初心者ばっか  
やもん、ゆつて」

和訳をしていた女子が着席する。半袖から出た、健康的な二の腕  
は、少しだけ汗ばんでいるように思う。

「横でしゃべってるから和訳間違えそうになつたじやん」と急にこちらを見て、彼女は言つ。開けつ放しの窓から風が入り、  
カーテンが大きく揺れる。そこから、中庭が見える。授業中なので、  
中庭は閑散としており、墓参りに行つた時のこと思い出す。

「サー…セン」

青い空と、古びた校舎を交互に見比べながらケイは言つた。彼女  
は、「冗談よ」と言つて肩を叩く。慣れないな、と思ったが、彼  
女の髪から香るコンスの匂いが、わずかに好意を煽る。

「実は私、その野球部のマネージャーなの」  
なるほど、そういうことか。

「それにしても、何で俺に声かけたの」

「なんか孤立してると、部活とか入つてなさそつかなって」  
嘆息を漏らす。周囲からそういうこと田で見られてるんだな。

「じゃあ、今度見学に行くよ」

「ほんと、やつた」

「おう、待つとするよ」

「そこの3人、いひむせいわね。しばらく立つてなさい」

「サー・セン」

相変わらず、カーテンは揺れている。中庭では、講義を抜けた学生が数人、バスケットボールを使って遊んでいる。

## 【ケイ】（スピノオフ）セクシーK（前書き）

本編にはあまり関係ない話です。読み飛ばしていただいても、まあ問題ないです。

## 【ケイ】（スピノオフ）セクシーK

ほんなくして、ケイは野球部に入部した。

部には、ケイと吉野、それ以外に同回生が一人いた。どちらもケイとは学部が違うので、結局、吉野とよく話すようになった。

吉野は、決して一枚目ではない。端的に言つて、不細工である。しかし、正確も独りよがりで、勝手である。そう、つまりいじらないであつた。本来、続くべき、「しかし性格はよく」というのもないである。

ケイは既に自分が危機的状況に立たされていることを気付いていた。「吉野君てなんだか暗くて何考えてるかわかんないよね」

「ていうか、変態ぽくない、田つきやばいでしょ」

「肌とか汚すきだし、生理的に無理」

女子の評判は大方このようなものであった。唯一、彼のいいところと言えば、鈍感なところであった。

彼は、あらゆる悪評に気付いていなかつたのだ。そして、彼はある時、言つた。

「俺、バンドやることになつてん」

衝撃が走る。ひきつった顔で「おお」と答えるのが精一杯だつた。「昔からバンドでギターやってたんやけど、先輩から誘われてな。しうがねえからやる言つたつた」

なぜ上から。

「バンドしてたのか、知らなかつたよ。で、入るバンドはなんて名前？」

ケイは鉛筆をクルクルと回しながら、聞く。吉野は机の下で、携帯電話をもぞもぞと触りながら、少しにやついて、画面を見せる。そこには、『多血羽名』と書かれていた。

「ん、なんて読むんだ？」

「タチバナ」

「…ん、ああそつか

「へへ」

もうだめだ。もつとポップな感じかと思つていたが、どうやらく  
ビーメタルのようだ。

「もう、HPに名前載せられるとんよ」

吉野は、嬉しそうに言ひ。回していた鉛筆が落ちて、コシンとい  
う音を立てる。

「これ、見て」

再度向けられた画面には、彼の写真と、『セクシー』とこう文  
字。

「うん、もう帰れわわ」

夕暮れが近づき、カラスが赤い空を飛ぶ。雲はゆっくつとその黒い  
影を移動させる。

何とかしなければならない。ケイは焦つていた。中国人から変態へ  
と渡り鳥のように旅をしていたが、何とかして安住の地を探さなく  
てはならない。大学から出る、長い下り坂で、突然、肩を叩かれた。  
振り向くと、そこに立っていたのは、坊主頭に、ダボダボのジーン  
ズを履いた男だった。

「自分、ツツミの才能ありそつやな」

「な、誰？」

よく見ると、田の下には深いクマがある。

「山縣で言つんやけど。三縣の『ガタ』は一生懸命の懸から心を抜  
いた字」

そう言つて、にかつと笑う。大きな肩幅で、夕日が隠れている。

「漫才の相方探してんねやけど、一緒にやらへん

「はあ」

山縣はまたにかつと笑つた。不思議の国のアリスに出てくる猫は  
きっとこんな表情で笑つていたんだろう。彼のニットセーターには、  
大きく『YES - I LOVE』と書いてある。

「めっちゃおもういやる、このセーター  
いや、だせえよ、限りなくｗｗ」

駅までの道が今まで一番短く感じた。

## 【ケイ】フローティング3

橙色の照明が安っぽさを助長する。店内には、サラリーマンが多く、笑い声や、仕事の話が充満している。その姿と、自分達の就職活動が上手く結びつかないのは何故だろう。

「セクシーK。それって何、あだ名」

ほとんど坊主に見える頭を触りながら、阿部が言う。

「まあ、あだ名というか、バンドネームみたいなもんなんだろ。何にせよヒヤンルがヘビメタだから、雰囲気合わないしな」

腕を頭の後ろに組み、壁にもたれかかるとして、後方に壁がないことに気付く。すぐに手をついて、後ろに反った体を支える。

「どんなバンドがやりたいの?」

柔らかく、耳障りのいい声で、明日香は聞く。やや下がった目じりからは母性が溢れているように見える。

「やるなら、ポップなのがいいな。軽いのは性に合わないけど、メロディを重視した音楽をやりたい。ミスチルとかスキマスイッチとかが近いけど、世界観はイエモンって感じかな。わかんないか」「おお、わからないなwww。俺は、ハモリ中心のボーカルグループを作りたいんだが」

「似合わないな。お前、珍念さんに似てるが、顔が」

「珍念さん…」

明日香は、阿部の方を見て、笑いを堪える。阿部がそれに気付き、「待て、珍念さんてどんな顔だ、イマイチわからないが、なんか嫌だな」

堪えきれず、明日香もケイも笑う。彼女は、笑うと、急に子供っぽくなる。肩がわずかに揺れ、その丸みが目に入り、触れたい衝動に駆られる。

ケイは「概ねそんな印象だよ、俺も」と言い、また笑った。

「では、宴もたけなわということで、一本締めでしめさせていただきたいと思います」

アルコールのせいでのすつかり視界が狭くなっている。今日はずっと明日香の方を見ていた気がする。そして、隣でちらちらと睨む、江美の姿も必然的に視界に入る。わずかに、だが。

阿部の掛け声と、慣れない一本締めで宴は終わった。それぞれ鞄とコートを、牛が草を食べるときのようにのろのろと拾い上げ、店を出る。阿部とケイは残つて、忘れ物がないかを確認する。空になつた煙草の箱、使われたお絞り、食べ残した刺身。それらをざつと見て、がさつな泥棒が入つたりビングが頭に浮かぶ。

江美が座つていた場所に、緑とピンク、白の3色が複雑に混じつたデザインのマフラーが、無造作に落ちている。

「こつちは何もないよ」

阿部がコートのボタンを止めながら言う。ケイは、マフラーを阿部に見せ、「さつきの口の悪い女の忘れ物」と言い、腕にかけると店を出た。

一人が店を出ると、学生達はまちまちに話しをしながらも、一人を待つっていた。

「あんた、マフラー」

そう言つてケイはマフラーを江美に差し出す。阿部が皆を駅の方へ誘導する。明日香もその最後尾に着く。

「あ、ありがとう」

江美はそう言つて、素直にそれを受け取り、首に巻き、

「明日香は、ダメだからね」

そう言つて、ケイの胸を人差し指で強く押した。

「あ、そ」

少し早足に、二人は集団の方に近づく。

「明日香は優しいから、いつも男に傷付けられる。だから私が守るの。それに今は彼だつているし、ちょっと優柔不断な人だけど、空に星は無い。無理もないが、都心部の明かりはいつもまぶし過

ざる。滲むネオンサインと、金融機関のビルボードがやたらと並立つ。

ケイは先ほどの店でこいつぞり聞いた、明日香の連絡先をメモした紙をポケットの中を探し、強く握った。

江美は明日香の腕に自分の腕をからませる。可愛らしい女の子のシルエットが林檎を想起させる。吐く息が白く、真っ暗な夜空に向かって登っていく。

「ダメなのはお互い様だよな、俺も彼女がいるんだし」

阿部が振り向いて、追いついて来い、というジェスチャーをする。

僕らはそんなに急いで、どこに向かっているんだろう。

## 【ダイ】クラシカル・マイラバー

すっかりコーラは無くなってしまい、コップの中で氷がからからと音を立てる。書きかけのエントリー・シート。消しゴムのカスを端に押しやる。

食べ終わったハンバーガーの包みの乗ったトレーを処理するためには、一度、席を立ち、また戻ってくる。もう何度も自PRを書いた。隣で女子高生一人が向かい合って、携帯電話でメールを打っている。その指を止めたかと思うと、ポテトに手を伸ばして、またパチパチとやる。

ダイはボールペンを何度もノックし、ペン先を出し入れした。今回は、バンドのことを書こうか、それとも、大学で研究している心理学の話を書こうか。広告制作会社の割りに、専用ホームページもなく、パンフレットも無い。決して小さな会社というわけではない。むしろ業界内では大手と言つていい。情報が無せ過ぎるのだ。ジーパンに入っていた携帯電話が鳴った。

「もしもし」

「ごめん、今着いたよ。どこにいる?」

「今、駅前行くよ。そこにいてくれる」

「うん、わかった」

携帯電話をポケットに戻すと、エントリー・シートと筆記用具をリュックに詰めて、店を出る。駅に行くと、彼女は赤い革の鞄を両手で持つて待っていた。

「ごめんね、寝坊」

「いや、ちょうどヒントリーシート書きたかったから、よかつたよ」

「ほんと?」

「うん」

ダイは首を振る。ちょっとしたつむじ風が起きる。

彼女はフリルのスカートがめぐれるのを抑えて、「どう行く?」

と言つた。薄手のタートルセーターに、ベスト。上からキャメル色の革ジャケットを羽織つてゐる。スカートからのぞく、脚が寒そうだ。

「寒くない？」

「うん、大丈夫。女の子だからね」

「そつか

ダイは彼女を連れて、歩き始めた。高架下をしばらく歩き、程なくして小さな居酒屋に入る。

「もつといい雰囲気の店の方がよかつたかな」

「うんうん、全然いいよ。高いお店って落ち着かないし」

「そつか、よかつた。ここのかみが上手いんだよ」

「じゃあ、それ頼もつか」

彼女は苦笑する。

「とりあえず、生頼もつか。すいません、生二つ」

「ね、ダイちゃん、就職活動はどう？」

彼女は身を乗り出して聞く。

「うーん、まあ、ぼちぼちかな」

「そう」

「そつかは？」

「うーん、今、決まりそつたのがあるんだ、メーカーなんだけど。人事の人が凄く優しくて、でもあんまりお給料もよくないし、まだ創業してそんなに年数経つてないから、ほとんどベンチャーみたいな感じなんだよね」

「そつか、まあでも薫が行きたいと思つてゐんやつたら、いいんじやない」

店員が生ビールを運んでくる。ジョッキが机に当たり、鈍い音を立てた。

「ダイちゃん、最近、気になる人とかいる？」  
ジョッキを持って、小さく乾杯をする。

「うーん、別に」

ダイはわずかに皿を細める。彼女は、ビールを3分の1ほど飲み干して、「やっぱりビールはおいしいね」と言つて、勢いよくジョッキを置いた。会話が止まる。周囲の余韻やBGMがよみ聞こえる。彼女はテーブルの1点を見ながら、

「最近よくメールしてるよね」

「ああ、ライブも最近は多いしな」

「そつか

「うん」

気まずい空気を嫌い、ダイはジョッキを頻繁に口に運び、ビールを流し込む。味はない。テーブルには突き出しの枝豆が運ばれる。パウチで止められたメニューを見て、慌てて注文をする。

「私、今、気になる人いるの」

「へえ、ってえ！？」

「驚くよね。なんか久々の感覚で、新鮮だつたよ、私にしても」

「いや、そういうことじやなくて、誰？」

「就職活動で会った人。ダンスずっとやってたらしいんだけどさ、ほら、私もダンスやってるじゃん。なんか話合っちゃつてさ。たまに食事とか行つてる。でも、向こうは彼女いるしさ。実らないんだけどね。一緒にいられるだけでいいや、なんて思つちゃつて」「そつか。なんか、どう言つていののかよくわからなーいな」

「うん、それで正直、もうダイちゃんに心が無いなって。よく考えたら、情みたいなものがあるだけで、もうお互いと一緒にいる意味はないように思うの」

「勝手だな」

「そうかな。ダイちゃんだつて、気になる人、いるんでしょ。そういうの、分かるんだよ」

「いや、まあ、なんかさ、それは今、関係ないじゃん」

「あるよ。最近、いつも上の空だし、優しいふりしてるだけで、心配なんしてくれてないの、分かるし」

彼女は少し涙を浮かべた。慌てて、おしごりを渡す。

「俺が泣かしてゐみたいだから、とにかく、あんまり大声出すなよ」「最後まで、自分のことしか考えてないね」

「いや、そういうわけじゃないけど。まあ、別れるつてもう決めたなら、仕方ないな」

「止めないんだね」

「止めても仕方ないんだろ」

「なんか、なんか、違うよ。やつぱり私とダイちゃんの間には、もう恋愛感情なんてないんだね」

「いや、あると思うよ……」

そう言って、ダイが自分の言葉が排気口に吸い込まれていくのが見える気がした。ある意味ではいいタイミングだったのかもしれない。確かに、就職活動で出会った女の子とたまに遊びに行つて、良好な関係を築いている。付き合いたいとも思つてはいる。おやぢく、向こうにも同じ気持ちだらう。

「さよなら」

彼女は赤い鞄を持つて、そのまま店を出て行つた。追いかけたら、無銭飲食で捕まるのかな。

店にぽつりと残つたダイを他の客がちらちらと見る。しばらくは平静を装つていたが、「可愛そつ」といつ単語が耳に入つてきたとき、ダイは勘定を済ませ、料理を残して店を出た。テーブルには、手のつけられない料理と、半分以上残つた生ビールが残つた。ダイは高架下を急ぎ足で駅に向かう。新しいバッシュが確かに地面を蹴る。その時考えていたのは、新しい女の子のことと、

「ええ歌書けそつやわ」

ということだけだった。

## 【トオル】ムーンラプソディー

「卖れないな」

人の部屋で煙草をくわえた先輩は呟いた。

「まあ、ぼちぼちですね」

煙草の先端で揺れる赤い火を見て、トオルは言った。

先輩帰つたら、ファブリーズしよ。てか、いつまでいるんだろ。

「うちのバンドの何がダメなのかね」

大きく煙を吐き出す。新曲の打ち合わせをしたいと言って、部屋に来てからずっとこの調子だ。トオルは、ベッドに置いた携帯電話が光ってるのを見ると、先輩に断わり電話に出た。

「ああ、今はちょっと。またかけ直すよ」

ぱさぱさの髪を触りながら、携帯電話をまたベッドに投げ、こたつに足をつつこむ。灰皿に溜まつた灰を上手く避けながら、先輩は煙草を押し付け、火を消した。

「お前はいいよな。才能もあるし、彼女もいる。それにまだ若い。楽しくって仕方ないだろ。俺は27でフリーター。卖れないバンドマンだ」

顎にはえたわずかな髭を触つて先輩は言った。

「そんなでもないですよ。最近は彼女と会つても楽しくないし、それに俺はバンドだつてやつてないし」

「なに、お前彼女と会つて楽しくないわけ」

「まあ、マンネリつてわけでもないですが、もう3年も一緒にだとキドキしたりとかの新鮮さは無くなっていますね」

「3年か」

そう言つて先輩はセブンスターのソフトケースからまた1本煙草を抜き出す。

「先輩、煙草、やめた方がいいですよ、体にも悪いし、声にも」

「皆吸つてるんだだし、そんな問題じゃねーよ、俺らが卖れないのは」

机の上に落ちていた髪を拾い上げ、「ごみ箱に捨てる。トオルは冷蔵庫からサイダーを出してきて、グラスに注ぎ、口をつけた。静かな部屋に炭酸の泡がはじける音が鳴る。

「窓、開けていいですか」

先輩が小さくうなずいたので、トオルは窓を開ける。乾いた風が部屋に吹き込み、コタツに置いたコード表がパラパラとカーペットに落ちた。

トオルはそれを丁寧に拾い上げると、ギターを持ってベッドに座つた。先輩は猫背になつて、顎をコタツのテーブルに乗つけて、煙をぷかぷかと吐いている。メジャー・コード中心の軽い音が鳴る。それに合わせて小さな声で歌う。

背伸びして いつもバランスくずしていくまいそうになるけど  
それでも走つていこう 青い空はどこまでも続くよ

「BLUE SKY MELODY」

灰皿に煙草を押し付けると、コップに入つたサイダーをかけ、火を消した。小さな音がなつて、か細い煙が天井に向かつ。ゆらゆらと揺れながら、少しづつ薄くなつて、それはやがて消えた。

「お前らしい曲だな」

「いい出来だと思いますよ、自分で」

それは嘘ではなかつた。ここ最近では最も気に入つた曲である。

本来、バンド用にはしたくなかったが、このままバンドが売れないと解散もあり得る。何だかんだ言つたところで、音楽を公表する機会は今のところバンド以外には無いのだ。

「いい曲だ。ライブで歌つてみたかったな」

コタツから出て立ち上がつた先輩はこちらを見ずに、言った。

「え？」

「解散する」とこじったんだよ、今日はそれを言いに来たんだ

「え、え？」

「お前には色々と協力してもらつたのに、悪かつたな

「え、マジですか」

「お前は音楽続けるよ

「え、なに、感動的な感じになつちやつてるんですか

「ほんと、悪かつたな。そんじやあ帰るわ。また、飯でも食いに行  
こうぜ」

そう言って、彼は部屋を出て行つた。トオルはギターを膝にのせたまま、田を丸くしていた。風はすっかりやんて、カーテンは気持ちよさそうに揺れている。部屋の電灯が、瞬いて、消えた。トオルはしばらく動けなかつた。

何分くらいそうしていたのか、思い出したよう

「電球買いに行かなきや」

とつぶやいて、パーカーを着込み、部屋を出た。外はもう暗くなつており、空を見上げると、輪郭の曖昧な三日月と月が合つた気がした。

これが3個目のお内々定だ。

おそらく30階はある高層ビルのトイレ。鏡の前に立ち、ネクタイを正しながら、ケイはそう思う。清潔感を出すために、きちつと分けた前髪をもう一度触り、斜めに流す。ネットの情報で、この企業の最終面接は、挨拶程度の意味合いしかなく、既に受かっているも同然だということを知っていたため、ケイにはかなり余裕があった。落ち着いているのには、もう一つ理由がある。それは激務薄給という評判のこの企業に入る気などさらさら無かつたからだ。

ピンクのネクタイにチェックのシャツ。それにグレーのスーツを着ている。本来、就職活動では、無地のシャツに、青とか赤のネクタイを使用する。グレーのスーツもかなり珍しい。

受付を済ませると、待合室へと招かれる。会釈をし、部屋に入ると、3名の女性がいるだけで他はまだ来ていない。大人しく指示された席に座り待つていると、隣に男が座る。男は、ケイの方を見て、「あつ」と短い言葉を発した。ケイは彼の姿を注意深く見た。アシンメトリーの髪に、低い鼻。うん、全然覚えが無いぞ。

「あ、ああ」

と愛想笑いをしたケイに、男は、

「あれ、覚えてない感じ? この前のグループワークで一緒だつたじやん

と肩を叩く。

「そうだっけ?」

とケイは首を傾げる。後ろの扉が開き、女性が入ってきた。今度は見覚えがある。向こうもケイに気付き、後ろに座った。

「ね、彼覚えてる? グループワーク一緒だつたらしいんだけど」

彼女はケイの問いかけで初めて、男の方を見て、

「覚えてない」

と首をかしげる。ケイは冗談半分に、  
「なんだつたら、いなかつたんじやない」

と言うと、男は焦つて、

「いたよ。ダイって覚えてない」

と二人の顔を交互に見る。二人とも同時に首をかしげ、  
「いたかな」

と困惑した。ダイは話の矛先を変えようと、

「ところで、この会社って、ここまで来たら、全員内々定なんだろ。それにしては数多くないか。例年だと20人程度のはずだぞ」確かに気付くと、待合室には既に20名程度の学生が緊張感を持って座っている。それに先ほど見た名簿リストには少なくとも50名程度の名前があつた。

「確かに変だな。まあでも大丈夫だろ？」

とケイはイスに深く腰掛けた。後ろで、女も、

「深読みしそぎじゃない」

と言う。鞄の中からノートを取り出しながら、ダイのこの不安も妥当なものであるとケイは考えていた。当然、例年20名しか採用しない企業の面接に50名が来たら、半分は落とされる。今年は売り手市場と呼ばれ、採用枠が広がっているにしても、2倍や3倍になるだろうか。

もし、内々定が一つも出ていなかつたら、もしこの企業を強く志望していれば、不安で仕方ないだろう。

待合室では、ダイの不安が感染したように一様にこの話題が溢れる。しかし社員には決して聞かれたくない話題なだけに、下水で蠹くねずみのように静かに、しかしほくの言葉が交わされていた。

ケイはすっかりうんざりしてしまい、少し眠ろうとさえ考えていた。

「はい、では今からよばれた人は隣の面接室に入つてください」  
スーツを着た社員がはつきりとした声で言つ。死刑執行人が現れたかのような、異様な緊張が走る。

「犬飼君、重田君、白井君、藤吉君、松木君」

呼ばれた5名は、社員の後に付き、隣の部屋に入るよう指示される。扉を開けると、大きな部屋に、役員が5名座っている。そして、それと向かい合うように、不安げにイスが5脚並んでいる。5名はぞぞぞ順に座らされる。ケイは向かつて左端に座ることとなつた。中央に座つた役員が、

「初めまして」

と低い声で言う。

「ようこそ、わが社へ」

重苦しい空氣に、一瞬、不確定な安堵感が立ちこめる。

「安心していいよ、もう皆さんには内々定を与えています。既に書類も作成しているので、帰りにもらつていいください」

それぞれに胸を撫で下ろす。ケイは興味無さそうに役員の持つている書類を見ていた。

「では、我々の紹介をしましよう」

と役員の紹介が始まる。そしてそれが終わると、「では、皆さんにも自己紹介を簡単にでいいのでもらいましょう、では君から」と役員は、犬飼の方を指す。

ケイは左端で今にも眠つてしまいそうな役員を見つめながら、何を言おうかと考えていた。どうせ、受かってるんだし、いつもと同じことは言いたくないしな。

役員の後ろには大きな窓がある。そこから街が小さく見える。犬飼の自己紹介が始まつた。

## イントロデュースミー2

犬飼は、ボサボサの頭に、メガネをかけている。大学院卒で現在は、25歳らしいが30代でも通りそうなほど、老けて見え、スースに出来た皺も、疲れたサラリーマンを想起させるものがある。

彼は大学時代に黄砂の研究をしており、モンゴルに渡っているそうだ。そこでの経験をどこか自身なさげに語る。語尾が少し揺れ、細かく汗を拭う姿が印象的だ。その態度とは裏腹に彼の話は興味深く、役員の目を引いた様子であった。

続いて、重田の自己紹介が始まる。垂れ目としまりのない口からは想像つかないが、ダンスコンテストで全国2位という実績を誇るパフォーマーだという。背筋を伸ばし、緊張感を持ったスピーチを行う。

順に流れ、ダイの自己紹介が始まる。

「私は、大学時代にずっとバンド活動をしており、最後のライブでは30名以上のお客さんの前でライブをしました」

膝に置かれた拳は強く握られている。役員が少し間を置いて、

「全員、友人とかじゃないの？」

と冗談交じりに質問した。ダイは、少し首を揺らし、苦笑いを浮かべ、「いいえ、友人は一人も呼んでいませんから」ときつぱりと返した。役員も「ん、なるほど」と短いあいづちを打ち、「では次に藤吉君」とトオルに話をうながした。ケイは、次に自分がする自己紹介の内容をまだ決めかねていた。気付けば隣にあるトオルが自己紹介を始める。

「私は、学生時代、ボランティアをしていました。その活動で全国に行き、家を建てるのを手伝つたりしていました」「ほう、家をね、大工さんみたいに？」

役員は手元の資料に目を落しながらたずねる。ケイは、周囲の

自己紹介が派手なため、何を言えばいいのだろうか、と考え、額に汗が滲む。隣にて、トオルが役員と会話をしている。

「では、次は松木君」

とついにケイに順番が回ってきた。

「あー……つと、僕は今まで話されてきた皆さんのように学生時代に何かした、という経験はありません。でも、何もしてなくても、今、そんな皆さん方と同じ土俵に立っていることを考えると、きっと何かいいものを持つてるんでしょうね」

と言い切り、ケイはにこりと笑う。ほどなくして、役員の一人が笑い、端ですっかり寝息を立てていた役員が、

「お前、大丈夫か」

と言い、大声で笑つた。それに感化されるように皆一斉に笑う。「まったく、今年の学生は変わったのが多いな

と中央の役員が、口ひげを撫でる。

「さて、では皆さんと来年の4月に会えるよう楽しみにしているよ」と言って、今度は薄くなつた頭を触つた。後方で立つっていた社員が、小さな声で部屋を出るよう誘導する。ケイを含めた学生たちは、何度も頭を下げ、部屋を出た。冒頭に役員が言つていたように、内々定に関する書類を渡され、5人はビルを出た。

「お前、ライブのお客さん全員友人だろ」

とケイはダイに言つた。

「あ、ばれてた？」

「しようもない嘘つくなよ」と背を叩く。

「でも、受かつてよかつたよ。他に行くところも無いし、承諾書、もう出していこうかな」

大きな川の上を端がわたつていて、コンクリートで出来た橋の手すりを触りながら、重田が言つた。それに呼応するように、数名が「そうだな」と言つ。ケイは慌てて、

「皆、他に選択肢ないの？俺、あんまり入る気無いんだけど」

と言つ。前を歩いていた重田は、驚いて振り返り、

「いや、この時期まで就職活動しててあんないい企業受かつたら、迷わないだろ」

とケイに言う。知らない間に季節は過ぎて、すっかり暖かくなっている。車道を走るトラックの排気ガスが宙に昇る。5人は横に広がりすぎていたので、犬飼は歩道から降りて、ふらふらと歩く。

トオルは端から見える汚れた川を眺め、そこを漂う工業用の船を見つける。船は波の無い水面をゆっくりと進んでいく。犬飼が、

「時間あるなら、飯でも食べて帰ろうか」

とまるで空氣にでも言つようじぽんやりと口走る。皆、それに賛同する。まるで宙に浮かんだシャボン玉のように、不規則で自由に、風に吹かれるがままに存在する、その何かは、6月の柔らかな日差しに反射し、七色に輝いた。

## マイテシジョン

1つ目の内々定はすぐに出た。それは2月の終わりだった。志望していた広告業界の中堅レベルの企業で、かなり早期の内々定だった。就職活動において、内々定が出ているのとそうでないのとでは、天地の差がある。それは精神的にそうであるほか、面接において内々定の数を聞かれ、それが選考基準の一つの参考基準になることもあるからだ。そういう意味では、ケイは順調に進めていたということになる。

しかしそれ以降、いいところまでは行つても、内々定が取れない状態が続いた。その一つの要因として、ある面接官に指摘されたことがある。それは、ケイのモチベーションの問題だった。

就職活動を始めた時、多くの学生は何とか内々定を取りたいという気持ちで、積極的な活動をする。しかし、その活動を続けていく内、自分が何を求めて仕事を探すのか、を考え始める。ケイのように広告業界を受けている学生の多くは、休みが無くても仕事にやりがいを、と思う。しかし、働くということを現実的に考え始めると、当然休みは必要だと思うようになる。これは決して悪いことではない。理想と現実の折り合いをつけなければいけない時期にさしかかっているだけのことである。

特にケイの場合は、最終的に60社の面接を受けるなど、散弾銃的な方法を取つたために、一つひとつ企業への思い入れは弱くなつていた。最終面接までは、言葉で誤魔化せるが、役員の目は誤魔化せない。ケイはあるで課題をこなすように面接を受け続けていた。

そんな中、4月に2つ目の内々定をもらつ。社員数10名程度のベンチャー企業だが、ケイを高く評価し、「君1名だけでも入ってくれれば今年の採用活動は成功だ」と言った。それが嘘でもケイにとっては嬉しかったし、仕事内容も悪いものではなかつた。ケイが通つていた大学は商科系だったので、財務諸表を見たが、健全な経

嘗を行つていよいよ見えた。結局、両親の強い反対にあい、内々定を断わった。

「この時、決して彼は親をうらんだけはしなかつた。実際、彼にも社員数10名の会社に対する不安があり、親の反対を押し切るほどの意思は無かつたのだ。

結局、ケイは6月まで就職活動を続けることとなる。もし、6月まで続けて、どこも受からなければ、一つ目の内々定をもらつた企業に就職しようと考えた。6月になり、残つたのは2社。新聞中心の広告大手A社と、イベント中心の広告制作会社BUNN。

A社は最終面接まで至つており、BUNNは先日内々定をもらつたところだ。内々定の承諾期限は迫つていた。

「ひつちこつち

手を振る小柄な女性が見える。

「ああ、すぐに分からなかつたよ、私服で化粧してると分からないもんだね」

ケイは席に着くなり言った。小さな喫茶店の中にはコーヒーの香ばしい匂いが溢れている。ホットコーヒーを注文して、辺りを見回す。大きなプロペラが天井でくるくると回つている。赤ん坊のベッドにつける玩具のように見える。カウンターにはコーヒー豆が飾られている。こげ茶色の豆は、ふくらとしており、見ているだけで口の中にコーヒーの味が浮かぶ。

「悪いね、呼び出して」

ウェイターが運んできたコーヒーカップを口に当てたまま、ケイは言つた。女は首を振つて笑顔を見せる。

「いいのいいの。このところ、ずっと就職活動ばかりでしょ。息がつまっちゃつて。たまには気を抜きたいの。それにケイ君の近況も聞きたかったし」

彼女は、首に巻いたストールを手で触り、遊ぶ。低い鼻に、薄い唇。真っ直ぐな髪は、ショートで前髪を眉の上までで止めている。「近況つことも無いけど、一つ、内々定をもらつたんだ」

「え、前に言つてたところ？おめでとう」

アイスラテをかき混ぜながら、彼女は言つ。彼女とは、A社の3次面接で会つて、それから少し喋つた仲だ。最終面接前に、6名ほどが呼ばれ、その中にいた彼女に話しかけて連絡先を交換した。ここにいた6名から、4名に内々定を出すといつ話を聞かされた。

「ああ、そこだよ。BUNIZ社」

「あそこって結構有名だよね。どんな感じだった？」

「よかつたよ。役員も優しそうだつたし。よく言う、激務薄給つて雰囲気は無かつたかな」

「そりなんだ」

氷が溶けて、カラと音を立てる。ケイはコーヒー カップにつっこんだままのスプーンを取り出して、皿に置いた。

「アヤちゃんはどうだつた？」

ガラス張りの店内からは、歩道を歩く人々の姿と、その後ろに見える大型の電気店が見える。その横には1000台は入りそうな駐車場と、忙しそうに走る自動車も見えている。横断歩道を小走りに走る女性が、手に持つていた鞄を落とす。それを拾う者はいない。ケイはそれを見ながら、拾いにいこうかと考えるが、そんなことを考える前に、女性は鞄を拾い、走つていく。ヴィトンだつたように思うが、角が地面に当たつっていたので、傷が付いていないかと空虚な心配をする。

目の前に座つてゐる女は、ぎこちない微笑みを浮かべながら、身振り手振りを交えて話している。その声は耳から入つて、そのまま出て行く。ミスター チルドレンの『光の射す方へ』を思い出し、唇を動かす。

その日は、店を出て、彼女の買い物に付き合い、別れた。A社で会つた6名の内、気が合ひそうだつたのは、今日会つた彼女だけだ。それでも一緒にいて楽しいというほどではない。

帰りに公園の横を通り、公園では夕焼けの中、母親と子供が遊んでいるシルエットが見える。子供は、ストローのようなものをくわ

えて、上を向く。ジャムを塗ったように赤い空に、球体が浮かぶ。ケイは立ち止まって、その球体を見た。シャボン玉は不安定に浮かんで赤と混じった。

赤い 赤い 目にしみるよ  
僕の命を燃やして

彼は声に出して言った。子供は無邪気にはしゃぐ。シャボン玉はすっかり見えなくなつた。ケイの体は夕焼けに染められたよつて、静かだつた。

どこに行くかを決めた。それは彼の人生において、大きな決断であるようにも、そうでないようにも思える。結局のところ、どうだつていいんだ。

ケイはまた歩き出した。薄いソールから地面の感覚が伝わっていく。シャボン玉は子供によつてまた作られ、空に浮かぶ。次々と空に浮かべられるシャボン玉を、ケイは振り返つて見ようとほ思わなかつた。

## スター・ダスト

BUNNに承諾書を出した日、最終面接で会つた4人にメールを送った。皆一様に「そうだと思った」という返信をしてきた。自分の中では、色々と悩んだ結果だったが、既にそのときには無意識に決めていたのだろう。2月に内々定をくれた会社には断わりの電話をした。6月末、ケイはこうしてスーツを脱いだ。

自分の中でもやもやしているものを全て吐き出してしまおうと思ひ、大学の友人である山縣と富士山を目指すことにした。山縣の実家がある兵庫県に行き、そこで自転車を買って、出発する。

出発の朝、母親が心配しているのを見て、「大丈夫」とだけ言った。兵庫県から富士山までは、約600キロ。なぜ富士山かと聞かれると明確な理由は無い。ただ、日本一高い山に登りたかつただけだと思ひ。

5日間かけて富士山へ行き、『来光を眺めた。下山して自転車を郵送し、バスに乗つて帰つた。

トオルからメールが来たのは、富士山から帰つてきて1週間後のことだつた。

「流星群が見られるらしいから、見に行こう」

とだけ入つていた。兵庫県養父市で見た空一面の星を思い出して、「構わないよ」と連絡した。ケイは薄手のパーカーを羽織つて、トオルが一人暮らしするアパートの近くまで來た。白の軽自動車が来て、ケイはそれに乗り込む。中には、最終面接の待合室で一緒だつた女の子がいた。

「あ、と…」

「片桐」

彼女は自分の名前を、無造作に口にした。トオルが前方に視線を集中させたままで、話し始める。

「今日、星見ようつて言い出したのは片桐なんだよ。一人きりで行くわけにもいかないからケイを誘つたんだ」

助手席に座る片桐がうなづくのが、後部座席から見える。

「何で片桐は星を見ようと思ったの？」

ケイは鞄からガムを出しながらたずねた。車は赤信号で止まる。

止まつた拍子にケイの鞄から携帯電話が落ち、慌ててそれを拾つた。

「んー、何となく」

携帯電話を開けて、壊れていなことを確かめる。トオルはウインカーを出し、右折した。

「どこに行くか決めてるの？」

片桐がトオルの方を向き、聞く。明るい茶の髪が大きく揺れる。女性特有の香りはない。トオルはフロントのミラー越しにこすり見て、

「そこに山があるから、あそこなら星もよく見えるんじゃないかと思つ」

運転席に寄りかかり、

「へー、ちゃんと考へてんだ」

とケイが言うと、トオルは口をへの字に曲げ、少し考へてから

「まあ…多分

と首を傾げる。

山に入ると、ヘッドライトが木々を赤々と照らす。道には砂利が多く、ざらざらと乾いた音をさせながら車は進む。時々、電柱と複数の電線のようなものが見える。それは暗い夜の中で一際黒く見え、悪魔の流した血のようにさえ感じられた。辺りは静かだつた。時々蛙の鳴き声が聞こえ、それに鳥の声が加わる。それ以外は静寂だ。少しづつ自分が自分でないような感覚に襲われる。一人でこんな所を歩いていたら、それこそ、知らない間に死んでしまいそうなくらいだ。

ある程度、山を登りきつてしまつと、少しづつ下りの道が多くなる。

「そろそろ車止めた方がいいんじゃないか。頂上に近い方が星は見やすいだろ」

ケイの言葉にトオルは、「そうだな」と短く返答し、車を止めた。エンジンを切り、ライトを消した途端に、何も見えなくなつた。片桐の「キャツ」という悲鳴の後、すぐにトオルはまたライトをつけた。

「ライトはつけたままの方がよさそうだな」

3人は車から出て、空を見上げる。小さな白い点が見える。それらは空にあけられた無数の穴のように見え、そこから、宇宙のもつと向こうが見えそうだった。

トオルは今来た道と、その逆を見た。どちらも、ただ道が続いているだけに過ぎない。その両端には薄くなつた白い線がある。

「向こうにキャンプ場みたいなものがあるぞ」

車道とはそのた方向を指しながらケイが言った。片桐が「行ってみよう」と言い、皆それに従つた。星は様々なところで瞬いている。キャンプ場に入るのに、三人は腰くらいまでの低い柵を越えた。

「これは不法侵入なんだろうな」

とトオルが言うと、ケイが、

「ここに、『夜間の無断進入は禁止です』と書かれてる。つまりはそういうことだ」

と柵の横にかけられた看板を携帯電話で照らして言った。

キャンプ場には、ただスペースがあるだけで他に何も無かつた。ただ、安い駐車場のように砂利が敷き詰められており、屋外用の汚いトイレと、水道がいくつかつけられた洗い場だけが忘れ物のように設置されている。三人はその砂利の上に寝転がる。

「これ、どれくらいの頻度で見えるんだろう」

「さあ」

「結構見えるんじゃない。流星群つて言つくりいなんだし」

「そつか」

「全然見えんな」

「そうだな」

「あ、今のそうじやないか」

「あ、私も見えた。あれ、やっぱそうだよね」

「ほんとか、見逃した」

ケイはそう言つて、小石を手にいくつか持つて、その冷たさを感じていた。車道に灯りが見え、車が凄まじい音を上げて通過する。

「あ、見えた。大きかったな」

「ああ、見えたな。もういいんじゃないかな」

トオルはそう言つて起き上がり、後頭部に付いた小さな石をはらつた。

「早いな」

と言いながら、ケイも立ち上がつた。片桐は胸の前に両手を組んだまま、まだ空を見上げている。その姿がひどく無機質に見えて、そのまま置いていつても構わないようだと思つ。

「トオル、トイレ行こうか」

「一人で行けよ」

「暗いから嫌だ。付き合えよ」

二人は30メートルほど先のトイレに向かつ。寝転んでいた片桐が、

「ちょっと置いてかないでよ」と叫ぶ。一人は振り返つて、

「そこで寝転んでろよ、すぐ帰つて来るから」と叫ぶ。

と叫ぶ。もう一度、空を見上げると、また流星が見えた。

「こつちは静かだけど、空の向こうは騒がしいんだろうな」

両手をポケットに突っ込んでケイが言つ。砂利を踏む音が心地よいリズムで鳴る。

「まあ、そういうことになるな」

「なあ、何してんだろうな。俺ら同僚つてことになんのか」

「まあ、そういうことになるな」

「同僚つて一緒に星見るもんなの」

と笑いながらケイは言った。トオルは

「まあ、そういうことになるな」

と言い、肩を揺すつた。遠くで鈴虫の鳴く声が聞こえる。

## アイファウンドイット

車はようやく光のある場所へ入った。時間は深夜1~2時を回っている。

「ウチに泊まる?」

トオルは決心した表情で言った。BGMが氣にいらす、身を乗り出してプレー・ヤーを触っていたケイは、手を止めて、「いや、もとからそのつもりだから」と言った。

「あ、そうなの」

とトオルが間抜けな声を出す。低い天井と暖房で少し気だるさを感じる。信号で止まっている間に、トオルはアタッシュ・ショボードから一枚CDを取り出して差し込む。空になつたCDケースを再びしう時に、トオルはちらと片桐を見た。彼女は一瞬戸惑つた表情を見せて、すぐに

「私なら大丈夫だよ。歸手、出さないでしょ」と何故か体を縮めた。

「ああ、トオルはそれを気にしたのか。それなら安心しろ。そこまで渴いちゃないよ」

後部座席から見える景色を見ながらケイは言った。

「す、ぐ失礼」

と片桐は言つたが、車の外を流れるネオンに夢中になつてゐるケイの耳には届いていない様子だった。

部屋に着くと、ケイと片桐はコタツに入った。まだ冷たいコタツに急いで電源を入れるが、二人はリスのように身を震わせた。冷蔵庫からサイダーを取り出してコップについているトオルの後ろ姿が見える。

「あ、コップ、2つしかないや」

開け放しの冷蔵庫がカタカタと壊れたような音を出している。

「何でもいいよ」

ケイはどうでもよさそうにテーブルの上に置かれた楽譜を取り上げる。横から片桐が首を挟み、のそきこんで、

「トオルちゃん、楽譜なんか書けるの」

と声を張る。トオルは高い位置にある棚を開け、湯飲みを取り出して、

「楽譜は自分が覚えとく用だから、適当。記号とかは結構抜けてるよ」

と言つて、サイダーの入ったコップを持つてくる。ケイは礼を言つて、部屋の隅に置かれたピアノを見て、

「それでピアノ」

と独り言のようにつぶやいた。三人はコタツに入り、あわせたようにならうに猫背になる。

「トオル、弾いてみろよ」

「あ、いいね。私もトオルちゃんのピアノ聴いてみたい」

そう言つて、片桐は手を叩く。子供の頃に、兄の誕生日会でハッピーバースデイを歌つたのをふと思い出して、ケイは「ケーキとか甘いものないかな」と小さな声で言つ。

トオルは、本当に重いものをもたされているかのような動きでコタツを出だ。

「男の一人暮らしでケーキとかねえよ」

と言い、ピアノの前に座る。楽譜を確認して、ピアノに指をかけれる。1音。確かめるように鍵盤を抑える。楽譜を見ていた片桐はトオルの方に目をやる。

トオルの頭の中で音が広がる。次にどの和音を出せばいいか、感覚で分かる。頭を少しだけ下げて、前傾姿勢を取り、指を動かす。

コタツから出ているコードのうねりを、確かめるように触つていたケイは、その手をすぐに止めた。1分間。トオルがピアノを弾いていた時間だ。それだけで楽器についての知識が無い一人にも、彼の

才能がはつきりと分かつた。

「トオル、バンドやるの。もつたいないぜ、お前の才能」  
ケイはこちらを向き直ったトオルに言った。シの音を出して、

「お前、楽器できるの？」

とトオルは聞き、ケイは出来ないとだけ答えた。

「じゃせめてギターできるやつ探さないとな」

と言つて、トオルはまたピアノを弾いた。今度は強弱をつけたジ  
ヤズに近いプレイだつた。それを一曲やりおえると、ケイとトオル  
は、落ちていたリングを拾うように

「ギターできるやつならいるじゃん」

と声を合わせた。「タツの中で足をぶらぶらと降つていた片桐は、

「え、あたし」

と自分の顔を指差す。ケイとトオルはすぐに言った。

「あああ、ねーよ！」

部屋で一人、ギターを弾いていたダイは、その手を止め、一度、大  
きなクシャミをした。

## 【ケイ】 Hムワンの奔走①

「M・1（漫才コンテスト）に出よか、それが歌手オーディション受けるか」

講義室は休み時間で、学生達の雑談に支配されている。1回生の夏、坂道で話しかけられてからケイと山縣は、すっかり打ち解けていた。初めの話題が当時世間を騒がせていた獵奇殺人の話だったのも、今となつては山縣らしい。

きょとんとするケイに、山縣はさらに続ける。

「富士山も登ったし、あとはエムワンか歌手やん。どうでもええけど、俺、あの後、一人で富士山3回登ったわ。インストラクターのバイトでな。君も誘つたやろ」

「富士山の話はいいよ、どうでも。それよりお前、一緒にやつてた相方はどうしたの？」

長机に置かれたペットボトルを取り上げて、上手そうじぐいぐい飲むと山縣は、教室の横一杯に広がった黒板を見て、

「お星様になつたんやな」

と遠い目で言った。

「いや、ペットが死んだときの子供への言い訳かよ。本当のところうなの？」

「実はな、あいつ借金があつたんやけど、それで首が回らんなつてもうて漫才どこりちやうねん」

山縣の相方には一度だけ会つたことがある。安く靴を買おうと誘われて、相方君のバイトしている靴屋に行つたのだが、その時に少しだけ話した。借金で困っているような素振りは無かつたが。

「そりやそりや、そん時から客にそんな素振り見せとつたりとつくて首やう」

斜めにかぶつていた帽子を脱いで、山縣は言つ。

「心読むなよ」

ケイは羽織つていたジャケットを脱ぎ、イスの背にかけながら言った。クルクルと指で帽子を回していた山縣は、思い出したよう今日、セクシーは? と聞く。

「さあ」

膝をついたまま、ケイは答えた。

チャイムが鳴り、白髪の講師が入つてくる。学生達の雑談は少し収まつたが、講義が始まるという雰囲気でもない。講師は騒がしい教室に少し眉を寄せる。

ケイは机に置いていたノートを鞄に直しながら、

「なあ、ふけよっか」

と山縣の背を叩き教室を出た。教室の外には、ひんやりとした心地よい空気が溢れている。ケイは軽い足取りでそこを抜け、中庭に出る。その中心には木が3本あり、それを囲うようにベンチが5台、円形に置かれている。誰も座っていないベンチを見つけると、ケイは勢いよくそこに座り、鞄を横に置いた。

同じ道を辿つて、山縣がゆっくりとこちらに歩いてくるのが見える。白に黄のラインが入ったスニーカーと、ポーターの鞄が印象的だ。

「君の悪い癖やな」

と、発売中止になつた煙草、「ゴールデンバット」を口にくわえる。この煙草を買い占めるのにつき合わされたのを思い出す。

「君、煙草は?」

「やめた。臭いし、料理の味が分かりにくくなる。それに喉に悪いだろ」

「1ヶ月くらいやつたな、煙草」

山縣は、いつものように手を組めて煙を吐き出す。

「M-1、考えといでや」

「今日、車? カラオケでも行こつか」

「うーむ。なんか俺たちいつもそうやな

「倦怠期の夫婦か」

山縣は、上をむいて力力力、と笑った。風が吹いて、木の葉が揺れ、ちょうどアンテナの入っていないテレビのようなザザ、という音がした。二人は勢いよく立ち上ると、

「行きますか、いつものように」

と、鞄を掴んで駐車場へ向かった。風はなおも吹いている。

## 【ケイ】 ハムワンの奔走2

「これ」

そう言つて山縣がケイに渡したのは、大手音楽レーベルのオーディション告知チラシだった。前面にピンクが散りばめられ、所属アーティストのライブ写真などが掲載されている。

「本氣だつたのか」

チラシに目を落としながら言つと、山縣は、「勿論」と親指を立てた。チラシの裏面には詳細が載つていて、日にちは、「えつ、今日！？」

確かにそこには今日の日付が書かれている。山縣は唇を尖らせて、こつけいな表情を作り、「イエス」とやたらはつきりとした発音で言った。

「今から受けに行こうや」

「お前、ほんと即行動派な」

とケイは呆れる。休日に突然呼び出した理由はこれだったのか、と一人納得し、

「構わないけど、本当に受けるつもりか？」  
と聞くと、山縣は少し考えて、

「現場の空氣次第やな」

となぜかまともなことを言つた。

「うん、多分無理だと思つてたよ」

ケイはペットボトルの水を飲みながら言つ。

「まあ、あの雰囲気で俺らみたいな半端な感じではいけへんやろな  
会場の熱氣に蹴落とされた二人はうなだれながら、ため息をつく。  
雜踏と眩しそぎる太陽が街を支配する。

「なんか中途半端な、俺ら」

「まあ人生はそんなもんやる。ほな、M・1出るか？」

「ゴールデンバットに火をつけて山縣は言つ。ケイはぼんやりと空を眺めて、次に山縣の方を見る。煙草を持つ指先が赤く滲んでいる。深爪でもしたのだろう。慢性的に滞在する鈍い痛みがこちらにも伝染したような気がして、自分の指を見てみる。目の前を一羽の鳩が首を振りながら横切つてゆく。鳩は時々、床に敷き詰められたタイルの隙間をつづいては餌を探している。歩道を通る自転車に驚いて、鳩は少しだけ羽ばたいたが、すぐに着地し、少し離れた場所で、また同じように餌を探した。

「やりますか」

ケイの放つたその声は、行き交う人々の鞄に滑り込んでいくようにその場を駆け抜けた。山縣は、その背中を見ているかのように、うつろな目で人々を眺め、

「エントリーまであと1ヶ月。ネタ作って、練習して。忙しなるな大型トラックがクラクションを鳴らし通り過ぎる。辺りは1時間前と何一つ変わっていないように見える。若者は先の尖った靴を履き、急ぎ足。老夫婦は他愛もない会話と観光を楽しみ、女の子は流行りの服を着て、イヤフォンを耳にさす。子供たちはいつまでも無邪気そうだし、カップルは今だけは幸せそうだ。

この世界にたくさんのカラーフィルムを巻き付けて、鮮やかな色に仕上げたのは誰なのだろう。

不意に指にひっかかるものを見つける。袖口から出た糸のほつれ。ケイはそれをちぎり、無造作に捨てた。その動作を見た鳩が、また首を振りながらこちらに近づいてくる。山縣のくわえている煙草の先が焼けるじりじりといつ音が耳元でうるさく聞こえたような気がした。

## イージーカム

秋になると運動会で流れていた『田園』という曲を思い出す。ケイの家は比較的田舎にあり、周囲を田んぼで囲まれている。10月になると、すっかり穂を重くした稻で田んぼは金色に染まる。夏の終わりに目指したM・1も、書類選考で必要となる写真の用意が間に合わず、失格となつていた。夢は来年へ持ち越しとなるが、焚き火につっこまれて灰になるか。いや、燃えないゴミでしかないような気がする。

スピーカーから割れた音で『田園』が流れ始めた。ケイは自然とその音のする方へ向かう。それはどうやら坂の上のフェンスで囲まれた運動場のようなところから流れているらしい。坂を下る学生たちは、皆まちまちに手に食べ物を持っている。フランクフルトや焼きそば、たこ焼き。可愛らしい格好の女の子と目が合つ。ケイはすぐさま目をそらすと、運動場を目指した。

曲がサビの部分に差し掛かった時、ケイはちょうど運動場に到着し、そこから見える30くらいある紅白のテントを見ていた。その日ばかりは誰も運動をしようという者もない。そりやそうだ、学園祭で我関せずと運動するような輩はちょっとない。いや、山縣を除いて、か。

ケイがわざわざ一人で他大学の学園祭に足を運んだのにはある理由がある。テントの間を縫うようにして、目当ての人物を探す。前から来た学生と肩がぶつかる。反射的に振り向くと、へらへらと笑いながら、「すいませーん、へへ」と前髪を触りながら去っていく男の姿が見える。

「おお、大丈夫か」

不意に前方から声をかけられる。慌てて前方を見ると、そこにはエプロン姿のダイが立っていた。

「あいつ、いつもあんな感じなんだよ」

三角巾を頭にかぶつたままダイは苦笑いを浮かべる。

「別に、かまわないよ。ただ俺はああいうナルシストはあんまり好きじゃないな。顔がいいならいいが、悪いのに格好いいと思つてるのは勘違いだ」

極めて無感情にケイはそう告げたが、その心中が穏やかでないのは誰の目からも明らかだった。友人を責められたダイは、一層の苦笑いを浮かべ、

「まあ、あいつにもいいところがあるんだよ」とその場を取り繕う。

ダイの参加している店で買つた大盛りの焼きそばをほうぱりながら、

「あんまり可愛い子いないね」

とケイは言う。上手く割れなかつた箸で器用にそばを口に運びながら、周囲を見回す。学生は地味で真面目か、派手にしたいんだろうが、地味だったのがすぐに分かる人間ばかりだった。それは男女に共通する。

「まさか本当に来てくれるとは思わなかつたよ」

三角巾を取り、置いてあるイスに腰掛けると、ダイは言った。焼きそばに入つている紅しじょうがを避けながら、

「ああ、実は頼みごとがあつてさ。そのついで」

とケイはことさら難しい顔をした。10月1日に行われた内定式で、トオル、ダイと顔を合わせたケイだが、他の学生との顔合わせもあつたため、雑談しか出来ず、本題を切り出せずにいたのだ。

怪訝そうな表情を浮かべるダイを一瞥してケイは話を続ける。

「実はバンドやりたいなと思つててさ。で、ギターやってたつとうお前に声をかけに来たんだよ」

「あー、なるほど。でも他に誰かいるの？ 確かケイは楽器弾けないよな」

「ああ、勿論だ。トオルも声をかける予定。あいつはピアノが弾け

るから」

「ピアノとギターか。もう一つ楽器があるといいんだけどな」

ダイは首をひねる。それを見て、

「我僕は言つた」

とケイは焼きそばの入っていた紙容器を「ミニ袋に投げられた。

「うーん、構わないけど、どんなバンドがしたいの？コピーバンド

？」

ダイに訪ねられて、ケイは初めて、特に予定のないことに気がつく。とにかくバンドをしたい、それだけだった。

「さあ、特に決めてない。トオルに声かけてOKなら一度、打ち合わせしようか」

ケイは上着のジッパーを上げて言った。それに呼応するようにダイは三角巾を被りなおし、立ち上がる。期せずして二人は並び立ち、風が吹き、黄色い砂が舞い上がる。祭りというには形式的な行事の中、彼らは別れを告げて、別の方へ歩いていく。

数日後、トオルから正式にOKの連絡があり、10月17日、3人はバンドを結成することとなつた。

## オープンドア

「まず、どんな音楽をやりたいか、だけど」  
テーブルには水の入ったコップが3つ置かれている。奥にケイが、  
そして手前にはトオルとダイが並んで座っている。ケイは彼つてい  
たハンチングを脱ぐと、鞄から紙を取り出し、それぞれに配つた。  
「あんまり音楽のジャンルとか分からぬから、やりたいジャンル  
の曲をリストアップした」

3人の頼んだ日替わりランチが運ばれてくる。重苦しい茶色の壁  
には、メニューが書かれた紙や、外国の写真が貼られている。カウ  
ンターには、家庭用の水槽が置かれており、数匹の魚が泳いでいる。  
昼時をはずしたためか、周囲に他に客はおらず、さつきから水槽に  
取り付けられた機器が細かく振動する音が響いている。

「ふうん、なんとなくバラバラだな。ロックとかフォークとか色々  
書いてるし。まずオリジナルバンドかコピーバンドかどっちをした  
いの？」

トオルは魚のフライを口に運んで言つた。ケイもそれに呼応する  
ように、フライを口に入れ、咀嚼してすぐに飲み込んだ。

「どっちをすべきかな？」

この質問にダイが答えを返す。

「バンドの目的によるな。ライブとかしたいなら1から曲作るより  
は、コピーバンドの方が早い。本氣で上目指すなら、オリジナルで  
やる方がいいな」

見るからにドレッシングをかけすぎたサラダにフォークをさし、  
考えるケイに、さらにトオルが  
「そうだな。バンド組んでどうしたいんだ？」

と聞く。口に入れたサラダは想像通り、味が濃く、眉をよせる。  
店内には『OCEAN』の『Bohemian Rhapsody』  
が流れている。ちょうどオペラ部分に入ったところでようやくケイ

は、

「『ヨーロピックステーション』出演を田指す」

と言い切った。

トオルとダイは、箸を止める。少しの沈黙を挟み、ダイが話をまとめようと、

「今のはだとメジャー『デビュー』したいってことだろ。じゃあオリジナルバンドにすべきだな」と返す。

「曲は？誰が作るの？俺か、それともダイか」  
そういうてダイの方を見たトオルに、ケイが

「俺が作るよ。俺の作ったバンドなんだから」

とすっかりサダラを食べてしまい言つた。トオルは額を手で押さえて、

「いいけど、楽器も弾けないのでビーツやつて曲作るんだ？楽譜とかコードとかにおこせるの？」

と不可解そうにたずねる。

「いや、無理だな。だから一人に協力してもらつてやるしかない。曲自体はもう出来るよ」

「聞いてみないと何ともわからないな」とトオルはおしほりで手拭いた。

「とにかくコードおこしから始めるきやいけないわけだけど、俺がトオル、どっちがやる？できればトオルにやつて欲しいんだけど。卒論とバンドで忙しくてあまり時間も取れないし」

トオルは少し考える素振りを見せ、「別に構わない」とだけ答えた。

その日はそれで解散した。帰り際、水槽の中で泳いでいた魚と田が合つたような気がした。

数日後、ケイはトオルの部屋を訪れた。前と変わらず、雑然とした部屋だ。コンビニで買ってきたジュースを冷蔵庫にしまつと、

「ところで、ずっと聞きたかったんだが、コードって何？」

とケイは聞く。「タツに足をつこんだトオルは驚いた顔で、「え、それすら知らないで曲作ってたのか？簡単に言うと和音のパターンで、これを組み合わせて曲を作るんだよ。曲の中で使われるコードの構成は大体決まったパターンがあるから、それに沿って作曲するのが普通なんだけど」

と答える。トオルの座っている場所とは別の辺に足を入れると、ケイは

「コードのパターンが決まってたら、同じような曲しか出来ないとになるじゃないか」

と反論する。もみ手をしていたトオルは小さくため息をつき、「そんなことないよ。基本のコード理論は知つてないと曲として聴きにくいしな」

とテーブルに目を落とす。ケイはジャケットのボタンをはずして、「よくわからないな」と、独り言のようにつぶやいた。

「まあ、とにかく作った曲を聴かせてよ」

とトオルが仕切り直すように言いつ。その言葉に鋭く反応したケイは鞄から、数枚の紙を取り出し、

「10曲分くらいの歌詞を持ってきた。どれにする？」

とトオルを見る。

「何でそんな持つて来てるんだよ」

とトオルは笑いながら、歌詞がプリントされた紙を見る。青色のカーテンが閉められており、外は見えない。朝は曇っていて、灰色の空が広がっていた。トオルが歌詞を見ている間、ケイは部屋を見回し、置いてあつたアコースティックギターを手に取る。適当に弦を押さえ、親指ではじく。

「ピック使つて弾けよ」

とピックを渡す。ケイはそれを受け取り、再度弦をはじく。頭の中で思い描いていた音は出ない。砂漠を歩く旅人のように。

「トオル、和音何か教えて」

テーブルの上に歌詞を置いて、ケイの方に歩いてくると、指をつまみ、それぞれの配置に移動する。

「それがこ。定番のコードで、爽やかな音って言われてる」

ケイはなるべく左手を動かさないようにして、ピックを動かす。ピックの持ち方もトオルに指導され、もう一度、弾く。和音が部屋に鳴り響く。ケイは嬉しくなって、何度も音を出す。青空をイメージさせる、その音をケイは忘れないように頭に留める。

「面白いな、ギター」

とケイはギターを弾く手を止めて言った。トオルはそれに答えず、ギターをケイから取り上げて膝に置き、

「よし、『ヨコハマレイン』にしようか。聴かせて」とピックを持ち、構える。

テーブルに置かれた歌詞から『ヨコハマレイン』と書かれたものを取り上げて、

「なんか突然歌うのって恥ずかしいな」

とケイは言ひ。トオルは短く「すぐになれるさ」と返した。さつきまで部屋に溢れていたコードとは対照的な悲しい曲調を頭に思い浮かべ、ケイは歌い始めた。

## ハザードイズミー

### 「ヨコハマレイン」

マイマイの揺る季節 小雨降る朝 小さな希望 胸に あわただしい日々 また始まる

梅雨に入つて湿気が高い 今日の降水確率は 20%のはずだったのに 何故だろう 何故だろう

ヨコハマレイン 降り積もれ 悲しみも今に思い出に 不揃いの切り口が今も

ヨコハマレイン 降り積もれ すべての夢を洗い流して それでも僕はこの場所に立ち続けるだろう

いつのまにか柔らかな雪が積もる季節の始まり ありふれた冷たさもいつのまにか慣れていた

君に忘れたことばかり次々と浮かんでくるよ 安っぽい春ですらあげられない

ヨコハマレイン 降り積もれ 代わる代わる季節が移り変わつても変わらないものもあるだろう いまここに

ヨコハマレイン 降り積もれ 例えばこの未来を洗い流して はかない花に少しだけ水をあげて

見たことない景色を見よう 聞いたことない歌を歌おう一人で

ヨコハマレイン 降り積もれ あの恋を隠せるほど 降り積もれ  
降り積もれ 降り積もれ

ヨコハマレイン 降り続け 決しておわりの笛を吹かぬよつに 僕だけを包み込んで ヨコハマレイン

ケイは最後までアカペラで歌つ。トオルは歌い終わると、難しそうな顔をして、

「兀ハマレインつて何？」

と「冗談ぽく言った。

「横浜で降る雨だらけ、多分」

とケイが言つと、

「お前が作ったのに、多分なのか」

とトオルはまた笑う。

「歌詞なんて思いつきみたいなもんだから、ほとんど宇宙から降りてきてるに等しい。何だか最近の単純で分かりやすくて、月並みな歌詞は嫌なんだよ」

そう言つて、ケイはポケットに手をつっこむ。「まあ、分からぬいのも問題だがな」とトオルは口元に微笑みを浮かべ、言つ。

「まあ、歌詞はともかく、曲はかつこいいな。バラードだけど、フックがある」

トオルが褒めるのを聞き、ケイは胸を撫で下ろし、「せつだる」と返したが、その答えを待つていたかのように、

「ただし、これを音符にしてくのは難しいな」

と釘を刺す。ポケットから手を出したケイはすぐに、「どうして」と聞き返した。ベッドの上でギターを持っていたトオルは、ピアノの前に移動して、

「例えば、この音がド、でこれがレ」

と一音ずつ鍵盤を抑える。

「お前が発音して中には、この鍵盤の間でどつかづかずつて音が多く混じってるんだよ。つまり楽譜上に存在しない音つてことになる」

「おお、じゃあ新しい音の発見じゃないか」

とケイは冗談混じりに返す。先ほどまでトオルが座っていた部分

の毛布がまだわざかにへこんでいる。

「そういうことじやないんだよ。今のまじや演奏できないから、その中途半端な音を一つずつ、じつちにするかを考えなきやいけないんだけど、それによって曲が微妙にお前のイメージと変わる。それに転調してる箇所がいくつかあるから、これも調整しなきやいけない」

「なんだか、よく分からぬいが、上手こじしていけばいいよ。それに転調って何だ？」

「うーん、転調つてのは言葉で説明しにくいんだけど、簡単に言うと、この音の次にこの音が来ると変だよ、っていう感じかな。例えばプロの場合でも曲の最後で盛り上げるために、サビをアレンジして歌うとき、急に高い音に移行したりとか。まあ基本的に転調すると聴きにくくなるから避けるべきなんだよ。楽器をやらないお前にとつてはよくわからないかもしねいけどな」

何だか分からぬいが、どうもダメらしい。ケイに分かつたのはその程度だった。自分が音痴であると思つたこともないし、言われたこともない。

「でも、もしかしたら音感に問題があるかもな。1音もはずさずに曲を歌わなきやいけないんだけど、今のお前にはそれが難しいかもな。曲を作る段階では、時間さえかけりや補正は出来るけど、実際歌うとなると、例えば楽器がはずしても、ボーカルが牽引するぐらいいに正確な音感が無いとやつていけないぞ」

自分が思つていたよりバンドとこつのは大変なようだ。バンドをやつているやつはたくさんいる。皆が皆、そんなすこい音感持つてるのか。ケイは深い思考の渦の中で、何とか息をしようともがき、水面に顔を出そと、

「その内なんとかなるだろ?」

と言ひ訳のようなことを口にして、また渦に引き込まれそうになる。

「お前は別に音痴じやないよ、カラオケ1回行つた時にも歌つてるのは聞いてるし。何か楽器をやつた方がいいってだけだ。そうだな、

キーボードとか買ってみれば

トオルは溺れるケイに浮き輪を投げるよつて言つた。取り急ぎケイはそれを掴む。しかし、ある不安があるのは確かだつた。それはケイがあらゆる音楽を記憶し、それと同じ音を出してこむに過ぎないという点にあつた。だから、カラオケでキーを変えるとそれだけでどう歌つていいか分からなくなる。ケイにとつて楽器の演奏は、ただそこにあるもので、歌うべき音を教えてくれるものではない。オリジナルの楽曲に関しては記憶する元が無いのだから、ケイにとつては正確に歌える道理はない。

「楽器買つて何とかなるものなのかな」

とつぶやくよつて言つ。その声はカーペットに落ちて、染みのようここそこに落ち着いた。

「キーボード弾いてれば、少しずつだけど、そこにある音だけで構成するようになつてくるよ」

とトオルは落ち着いた声で言つ。ケイはそれを信じるしかなかつた。

朝から夕方までかけて、『アーバンマーレイン』と他に一曲を楽譜に書いておこす。

「後日コードをダイにもメールで送つておくれよ」

とトオルはピアノの電源を切つて言つた。

「なあ、バンド名決めようよ」

とケイは帰り際に持ちかける。

「駅までの間に考えようか

そう言つてトオルは部屋を出で、車を家の前に回す。

「何がいいかな。会社名とか?」「BUNNか、やめとけよ」  
運転しながらトオルはケイの意見を却下する。赤信号で田をやりながら、

「歌詞に入つてた言葉にしようか。何かあつたかな」

とトオルは背にもたれる。空は暗い。信号が青に変わり、車が動き出す。人通りは少なく、寂しい町だな、と思つ。

「ムンクにするか。そんな歌詞無かつた?」

と思いついたようにトオルが言つたが、今度はケイが「作った曲の中にその歌詞はあるけど、ムンクは既にいるぞ。それになんかバンドイメージと合わないしな」と却下する。

「ナナメつて曲があるんだけど、それにしないか

とケイが提案する。遠くに山が見える。黒く、重苦しく見える。チ

ーン店の看板がうるさく目に入る。

「また考えておこつか」

トオルはそう言つと、駅のロータリーに車を止めた。ケイはすぐに車を降りる。ロータリーには他にも数台の車が停まつていて、タクシーが数台出入りしている。駅に吸い込まれていく人々の背からは、楽しそうな雰囲気など見て取れない。そんなもんだろう。

「太陽みたいな底抜けに明るい曲は作れないが、月の光くらいなら作れるかもな」

とケイは言つた。空に月はまだ見えない。カラスのシルエットが3羽ほど空を横切る。トオルも車を降りていた。二人は黙つて、ほの暗い空を見上げていた。

僕らはどこに向かつて走つているんだろう。早く光の射す場所に行かなくちゃ。

「早く行けよ」

トオルが言つた。

「分かつてるよ、またな」

ケイはそう言つて改札に向かつ階段を駆け足で上る。

その日の空は暗かつたが、雲は無かつたように思つ。

## プラクティカルリレーション

観覧車の頂上でキスをする、なんて下らないことはしないけれど、二人はじゃれあうようにキスをした。目を開けると、上半分がガラスになつているため、海が見える。それにいくつかの商業船と觀光船。それらの灯りが少しだけ海面に反射する。黒い海に波が立つているのがわかる。

「よかつたの？」

ケイは明日香の頬に指で触れ、聞いた。彼女がうつむいてたので、マフラーで口から下が隠れる。小さな観覧車内で一人の肩は触れたまま、忘れ去られてしまつたようになつたよにそこにある。今度は積極的に唇を押し当てて、

「よかつたんだと思う」

と彼女は頬を赤らめる。地上が近くなり、やがて観覧車は止まり、二人は手をつないで降りた。

少し歩いて通りに出ると、街路樹に電飾がくぐりつけられ、青色の灯りが遠くの方まで続いているのが見える。白い息を吐きながらゆっくりと歩いていく。コートのポケットで携帯電話が鳴った。ケイはそれを取り出して、画面に表示された恋人の名前を見て、大きく息を吐き、空を見上げる。その様子を明日香は心配そうに眺める。

明日香とは以前の飲み会の後に何通かメールを交わしただけであった。また会おう、という社交辞令を交わして、それからずつと連絡は無かつたし、ケイの方からもしなかつた。お互いに恋人がいて、積極的になるわけにはいかなかつたからだ。

明日香のことを忘れかけていた頃、突然、電話があり、一緒にイルミネーションを見に行こうと誘われたのだ。友達と遊ぶだけで、やましいところなどないのだと自分に言い訳し、ケイはそれを承諾した。結局、一人でご飯を食べ、観覧車に乗ろうという流れからキ

スをしてしまった。突発的な事故のようでもあるし、一人がそれを望んでいて、なるようになつたような気もある。

「ねえ、このネオン瞬きするらしいの。雑誌で読んだんだ」

明日香ははしゃいだ素振りで言つた、「こちらに目は向けない。ケイは携帯電話をしまい、

「一瞬消灯するってこと? 見れたらいいね」

と彼女に微笑む。ようやく彼女はこちらを向いて、笑顔を見せる。おもむろにこちらに手を伸ばし、ケイのコートのボタンを留める。ほとんど条件反射的にケイは彼女の体を腕で包んだ。一人の周りをいくつものカッフルが横切る。微かな視線を感じるが、視界のほとんどは彼女の頭で遮られている。髪からは甘い香りと、艶やかな感触が伝わってくる。そして、何の告知もなく、ネオンが消え、1秒後にまた点灯した。手前から順び点き、光が奥へ流れていよいよ見える。

「今、消えたね」

彼女の頭に向かつて言つ。

「本当? ケイ君が抱きしめるから見逃しちゃつた」

左手が彼女のお尻に触れる。その柔らかな感触は、履いている厚手のジーンズのせいでよく分からぬ。彼女は突然頭を擧げ、ケイの顔を見上げ、

「エッチ」

とだけ言つた。二人はまたキスをしたし、その後だつて何度もした。それに触発されたカッフルが近くでキスをする。コートでまた携帯電話が鳴つた。

夥しい数のネオンと、曲がった道。その先はしかし暗くてよく見えない。

明日香との未来はない。彼女の方はどうだか知らないが、ケイは今の恋人と上手くいっている。お互いに愛しあつてもいるし、それなりに将来のことを考えている。

「私、彼氏と別れたの」

明日香は12回目のキスのあと、そう告げた。ケイは驚いた素振りも見せず、「そう」「そう」とだけ返事をした。眉で揃えた前髪を触りながら、明日香は取り繕うように「別にケイ君に彼女と別れて欲しいとかそういうつもりはないで、こうして会ってくれたらな、って思つてるだけ」と目をそらす。

言わなければいけないたくさんの中の言葉のかわりに、ケイは13回目のキスをした。

## ザ・シーモズ・カマンタン

「なんでエレキギターなの？」

ケイとトオルは声を揃える。ダイはエレキギターのコードを機材に差し込みながら、一人の方を見て、「いや、今回はエレキかなと思つて」

と首を搖らす。バンドのスタイルをピアノ&ギターと決めた時から、ケイとトオルの頭ではアコースティックギターの音が流れていだし、特に、今回の曲「ヨコハマレイン」はアコースティックが似合う。

「まあ練習だからいいけど」

ふてくされたようにケイは言つ。紺のパークーに黒の革ジャケット。着古して、フニイクの革にはひびが入つていて。

毛糸地の上着を脱ぎながらトオルは苦笑いを浮かべる。気にせずダイはギターの音と、機械の相性を調べる。鋭くて粘り氣のある音がスタジオ内に響き渡る。ケイとトオルは目を合わせて、全然雰囲気に合わない、と言葉に出さずに意識を共有した。

続いてダイの発声練習が始まる。先ほどからイスに座つたままのケイはその様子を黙つて見ている。トオルはとくど、すっかりピアノの前に座り、自分の世界だ。あまりにも暇だったので、ケイは立ち上がりつゝ、もう一本あるマイクを掴み、

「so make me love！」

とテタラメなメロディーで歌い始める。

「going to my dream land · just knock on my door」

隣で充分に发声練習を終えたダイが、「何それ？」と聞くので、

ケイは前を向いたまま「今作つた」と覚めた目つきでいる。

「ダイ、送つたコードはちゃんと見てきた?」

とトオルがたずねる。ぱつの悪そうな表情を浮かべ、

「まだ見れてないんだ。でも一応、メールは印刷して持ってきたか

ら

とダイは返す。そしてその落ち度をかき消そうと急いで印刷した紙を取り出し、ギターで弾き始める。一通り弾き終わると、ダイはトオルに、「こんな感じ?」と聞き、「まあいいんじゃない」と入ることのようになりトオルは返す。そのやりとりを眺めながら、ケイはマイクを触る。冷たい金属の感触と、少しの湿りを感じる。いくつかのネジを回し、高さを調節すると、

「試しにやってみよう」

とわざわざマイクを使って言った。

「OK」

トオルはそのまま歌いつと、ピアノを弾き始める。流麗な指使いから正確に刻まれる音の世界。

「待った」

その声でピアノの音が急に止まる。止めたのはケイだ。

「歌い出しがよく分からぬ。そのフレーズを2回しで歌い出したらいしい?」

「回しつて単語の意味が分からぬが、そうだな、このフレーズが2回あつてから歌い出し。じゃ弾くよ」

再びスタジオに音が流れる。所定の位置でケイは歌い始める。

「違う。もっと上。1・5音くらいかな。ピアノとはずれてるのわからない?」

ピアノを止めてトオルはケイに言つ。ギクリとしたケイは、強がつて

「全く分からぬ。とにかくこの音でいいのか」

と先ほどより高い声を何度も出し、トオルにOKをもうひ。ケイはその音を忘れないように頭の中で何度も反復しながら、イントロを聞く。歌い出し、少しずれたが、微調整して合わせる。ダイ、トオルともに何度も演奏ミスをしながらもサビ終わりまで終える。ケイは大きく息をつき、持ってきたペットボトルの水を飲む。ト

オルはピアノの前を動かない。ダイは首を揺らしながら、ギターで小さな音を出し続けている。

「ボーカルの音程が揺れてる。音程が安定しないと聞きづらいから上手く聞こえない。直さなきゃいけないな。課題は山積みだ」

口をへの字に曲げてトオルは言つ。ケイは正面に見えるガラス窓をぼんやりと眺めていた。窓にはいくつかの傷があり、そこから見えるのは見たこともない機材ばかりだ。

「そのへんはいつか上手いことなるだろ」

ペットボトルを鞄に直し、ケイは言つ。トオルはその答えを聞きたくもなさそうに、鍵盤に目を落とす。

「俺、コード弾きじやあんまりだな」

ギターを弾いていたダイがつぶやくように言つ。

「どうじうこと?」

トオルが面倒くさそうに聞く。一人の会話はお互の間で落ちてしまつて、交わつていよいよ感じられる。

「コードおりに弾いてるけど、トオルの弾くピアノもコード弾いてるからさ」

語尾がかずれるように小さくなる。面倒な言い回しをするダイに少し苛立ちを見せる早めの口調で

「どうじうこと?」

とダイが訪ねる。

「もつたいないな」

とケイが割り込み、その言葉に反応したダイは、

「そう、まさにそれ。もつたいないんだよ」

と大きなジェスチャーを交える。

「じゃあ俺がピアノで弾く音を減らせばいいのか?」

トオルは片手で音を鳴らす。

「そうだな、それしかないかな。じゃないとギターの、というか俺の存在意義ないしな」

「じゃあいらないな」

とケイが茶化すように言つた。予想に反し、ダイは無反応だ。トオルは笑いながら「ひでえ！」とだけ言った。

「もしくは俺がコード弾きやめて、違うメロディーを弾いてつか」とダイは提案する。

「じゃあそうしてくれ。トオルと打ち合わせして」ケイはそう言って、ふらふらとドラムの方に行き、ドラムを「タラメ」に叩き始める。素人が叩くドラムは、意外にも軽快な音を奏でる。ひとしきり叩き終えると、ケイは満足そうに言った。

「ほんなのじう〜。」長い前髪をうつとおしゃうにかきあげる。染色された前髪の間から、くつきりとした一重の目があらわれる。まばたきを数回する。ダイのギターに合わせてピアノを弾いていたトオルは、軽快な指の動きを即座に止めて、

「デタラメすぎ。ねーよ」

と笑つてみせる。

その間、黙々とギターを鳴らし続けていたダイは、我関せずといった様子。トオルは、先ほどのことを重ね合わせて、ダイに

「うつせ〜」

と一言。ダイは苦笑いを浮かべ、首をふらふらと横に振った。まるで首のすわっていない子供のよつよつ。ドラムに飽きたケイは、ふらふらとトオルに近づいた。

「トオル、いけそう？」

トオルは少し考えると、ケイの方を見て、

「解散だなwww」と漏らした。

## エンドオブパーティー

キノコのカサが揺れる。いや、そんな髪型をしているだけだ。ケイたちが練習しているスタジオは、木下さんというキノコ頭の男が個人でやっているところだ。酒のせいに出たおなかを触りながら、「君達はどういう知り合いなの？」

とたずねる。練習を終えて、スタジオを出る準備をしていた3人は、木下の方を見て、誰か答えるよ、というように肘をつきあつた。トオルが予約したスタジオということで、渋々、「会社の同期です。まだ内定の段階なんですが」

と答えると、木下は不思議そうな顔をみせ、鼻をならした。ケイは改めて、内定者同士でバンドを組むという奇妙な巡り合わせについて考える。鞄を持つたケイを見て、木下が、「君は中々筋がいいね。でもプロになりたいなら、ちゃんとレッスンを受けた方がいい。なんなら紹介しようか?」

と近づいてきた。垂直に降ろした指には濃い毛が生えている。靴とズボンは奇妙な色の取り合わせだ。ケイは明らかに不快そうな表情を浮かべ、「そのうち」

とだけ答えた。そんなぶつきらぼうな様子を見ても、木下は構わず続ける。

「君たちがよければ、今度ここで内輪だけのライブをやるんだ。それに出ないか?」

トオルは表情も変えずにケイの方を見る。ダイは何かを考えている様子だ。ケイはトオルを見て、その表情から何も読み取れなかつたので、

「少し考えさせてください。また、連絡します」

と首を触る。スタジオを出ると、黒い空に夕焼けが溶けていた。小道を進み、大通りで右に折れると、左手に小さなトンネルが見え

る。先のほうは暗くてよく見えないが、小さな猫のよつなものが見える。ケイは足を止め、身をかがめ、トンネルの奥をのぞこうとするが、2人に置いていかれるので、すぐに諦めて小走りで追いつく。

「さつきの話、どうする?」

少し呼吸が早まつたケイが聞く。トオルはスケジュール帳を取り出し、

「予定の日、スケジュールが微妙かも。まあ、出るならあけるよ」とつぶやくように言った。ケイはライブなど無論したことがないので、少し興奮していた。それに対し、後の二人はライブにそこまでの関心はない。

「ま、このバンドでのライブとしては、1回目だし、いいかもな」とトオルが続ける。その言葉にケイは安心し、「よし、じゃあ出ようか」

と結論を下す。空を鳥のシルエットが飛んでいく。甲高い鳴き声が遠くなる。ギター・ケースを背負いながら歩く、ダイは自然と猫背になっていた。

「やめといた方がいい」

不意にダイはそう言った。ケイはすぐにその理由を聞いた。

「今のはスキルでは人前でやるレベルに達しない」

「そりや練習ほとんどしてないしな。だからこそ、今回みたいな身内みたいなライブの方がいいんじゃないかな」

「俺もケイと同じ意見だな。身内だし、いいんじゃない。それで悪いことか直せばいいし。場慣れの意味も含め、やるのは賛成だよ」とトオルがケイに賛同する。ダイが歩くたびにギター・ケースが揺れて金具が小さな音を立てる。

「世の中には高いレベルのバンドが腐るほどいるんだから、今のまじやだめだ」

薄いソールの靴がぺたぺたと情けないリズムを刻む。

「そんなこと言つてちやいつまで経つてもライブできないよ」

とケイは苛立ちを含んだ口調で言い放つ。トオルは悪い雰囲気に

なり、口を閉じる。誰も何も言わなかつた。そのまま駅まで歩いて電車に乗つて、その日は帰つた。

それから、ケイは卒業旅行で海外に行つた。ダイは卒業論文の執筆で忙しくなり、トオルも同様に多忙になつた。そして3人は社会人になつた。仕事は思つた以上に難しくて、たまに飲みに行くことはあつたが、バンド活動はすっかり休止してしまつ。

後に、ケイとトオルは言つ。

「ダイとの人間性の違いで、バンドは解散したのだ、と」

## ケセラセラですまない

妙な夢を見た。彼女の膝に頭を乗せて、穏やかな気持ちで全てを話す。それはとても安らかな夢で、穏やかでない現実だった。

「ハツ」

ケイはが目を覚ますと、彼女の顔がすぐ目に入った。その目にまうつすらと涙が浮かんでいる。

「じめん」

どうしてだか、全てが一瞬で分かった。ただ、その時、部屋にどんなものが置いてあつたかとか、テレビがついてたかとか、そんなことは何一つ分からなかつた、ただ、彼女を泣かせている、ということだけがケイの頭を支配していた。

彼女が沈黙しているので、ケイは再度謝つた。彼女は涙を拭つて、笑顔を浮かべて、

「もういいよ。別れて、その浮氣相手のところきなよ」

と鼻声で言った。その強がりは、胸がカッターで切り裂かれるような鋭い痛さを感じさせる。

「俺は、そんなつもりはないよ」

下らない言い訳で彼女の気が変わるとも思えなかつた。1年前に買ったブタのぬいぐるみが冷ややかな視線をこちらに向かっている。こっち見んな。

「もう、どう接していいかわからない。早く帰つて。見てるだけで気持ち悪いの」

ケイはようやく起き上がつた。酒を飲みすぎたせいで、まだ頭が痛い。それにこれが夢のような気がしてならない。彼女の肩に手を触れようとすると、彼女は急いで体を反らした。空を切つた手は行くあてを失い、おとなしく自分の膝に乗る。変な話だが、こうあってもなお、膝枕をしてくれていた彼女の優しさにわずかな希望を感じる。

「俺のことが嫌い？」

「そういう問題じゃない」

そりやそりや、と納得する。彼女は目も合わせない。今度はキスをしようとした顔を近づける。首をねじり、それを逃れようとしたので、結果的に彼女の髪にキスすることとなつた。

「本当に帰つて」

悲鳴のように彼女は言つ。漫画や映画では浮氣したつて大した問題になつてないつてのに、実際にしてみると大した問題だ。

「俺はその子と付き合つ氣なんてないよ。そのことは彼女にも言つてる」

「知つてるよ。面白くべらり全部話してたよ、君。もう一人言い寄つてきてる子がいることも」

「おおう、そこまで」

思わずケイは声を漏らす。確かに、友人と飲みに行つた時、出会つた子に好きだと言われている。それに対しては、返答していない。「それは浮氣じやないよ。別にどうこうしたつてわけでもないし」「もう一人は完全な浮氣だつたけどね

「ごめん」

事態は振り出しに戻る。深夜2時。重い頭に大した思考力はない。「とにかく寝よ。明日話そう」

冷静な脳なら、こんな申し出を彼女が受けるわけがないと言いもしないはずだが、何しろ酒が残つてゐる。しかし、彼女は従順にも布団に入る。お互に疲れている。何も言わずに背を向け合つて眠る。

翌朝、彼女の方が先に起きて、洗濯物だの、家事をしてゐる。ケイが起き上がると、彼女はいつもと同じように

「おはよう

と言つた。ケイも同じように「おはよう」と返す。

「荷物持つて帰れる？」

見ると、玄関に大きな紙袋が2つ置いてある。そこには見慣れた

自分の服が入っている。

「持つて帰らないよ、置いておく」

子供のような口調でケイが言った。彼女はなるべくばかりを見ないよついでし、

「邪魔だから」

と無感情に言った。外から入る太陽の光でケイは目を細めた。小鳥の鳴き声が聞こえる。

「ねえ、俺は別れたくないよ。あの子とのことはあきらかに精算するから」

「江美ちゃん？」

おしゃべりすぎで困る。

「名前まで言つてたの」

ケイは頭を抱える。彼女は楽しそうに、

「うん。すじくひどいことも色々言われた」

と言つ。昨晩からずっと心臓に針がささつてゐるようだ。どちらよりも鈍く痛んだり、鋭く痛んだり。

「「めん」

「謝らなくていいから早く出て行つて」

「嫌だ」

彼女はため息をつく。

「こんなやり取りしてたら、きりないじゃない。もう、別れたいの」

「だから、嫌だ」

ケイはうなだれながら、返す。まだ少し頭は痛い。

「好きな子と、自由に付き合つたりいじやない。もう誰も怒らない。その方が私といふより楽しいでしょ」

「そんなことない」

彼女は絨毯の上に座る。ぬいぐるみは同じ場所にずっとこる。ケイはパジャマの自分を見て、生活感が溢れてるな、と思つ。そして、もう何度も考へてこる」とを口にする。

「結婚しようつ」

彼女は少し黙ったあとに、優しい笑顔を見せて、

「嫌よ、こんな甲斐性なし」

と言つた。ケイは手を伸ばして彼女の体の一部に触れようとする。彼女は昨晩のように嫌がらずに、ケイの手は彼女の腰あたりを触つた。

「ケイ君にそんな顔されると私が悪いことしてるみたいじゃない」と彼女は眉を寄せながら優しく言つ。いつからか、泣いていた。

それに気付いてもいなかつた。ケイはすぐるように彼女にキスする。彼女はそれに応じるでもなく、拒むこともなかつた。

しばらくそんな風に付かず離れず過ごした。彼女は時々、別れようといふこともあつたが、そのたびにケイはそれを拒み続けた。そこにはずっと消えはしない傷がのこっているが、二人は結局一緒にいる。

## アンブレイカブル

「別れよう」

そう言つた彼女の目は真剣だつた。眞つ黒な瞳が無性に愛しく感じたのを覚えている。でも、トオルは何も言えずに、そして彼女は何も言わずに、その場を去つた。

音楽も、灯りもつけずに、部屋で座つてゐると、深海魚になつたような気分になる。

今なら、まだ間に合つ。

ぼんやりとした視界を何度も同じ考えがよぎる。このまま何もしないければ、彼女はいなくなる。そしてこれまで過ごした日々も精算される。一人になる身軽さと、彼女の大きさを天秤にかける。それがどちらに傾くのか。

トオルはそんなことをぼんやり考えながら、2日過ごした。そして、彼女に連絡した。

「会つて話をしよう」

連絡は一日後に返つてきた。

「部屋に行くわ」

トオルは天井を見上げた。天井に接するものといえば照明しかない。だから天井は丸く電球に切り取られている以外は他に何の干渉も受けない。そんなことを覚えていると、部屋のチャイムが鳴る。しばらくは気付かなかつた。うかつにもトオルは寝てしまつていった。慌ててドアを開けると、見慣れた女が立つてゐる。ワンピースに花柄が散りばめられた薄いカーディガン。

「暑くなかった？」

「別に。それでも、寝てたの？」

「うん、まあ」

「相変わらず正直ね」

彼女は部屋に入ると、いつもの場所ではなく、テーブルの前に座

つた。

「ベッド、座らないの？」

トオルが聞くと、

「座らないわよ、」「うつときは普通」と短く返す。トオルは冷蔵庫から麦茶を出し、口ップに入れる。

彼女はその間、変わらない部屋を見回していた。

グラスを二つ、テーブルに置く。中に入った氷がカラカラと音を鳴らす。古いアパートについているふるいエアコン。グウグウと重い音を鳴らして動く。

「変わつてないね」

麦茶を一口飲んだ彼女はつぶやくよう言つた。

「部屋？」

「うんうん、トオル」

蝉の鳴き声がガラス越しに遠く聞こえている。

「お茶おいしいね」

彼女は言つた。

「煎餅、あるけど食べる？」

彼女は煎餅屋の娘で、大学時代の先輩。初めこそ敬語で話していくが、付き合つてすぐに、彼女の方から敬語を使うなと言つてきた。二人は仲がよかつたように思つ。

「じゃあ湿り煎餅食べたい。そんなことより、話つてなに？」

トオルは棚から煎餅を出してきて、皿に盛り、テーブルに置いた。

「どうして別れたいの？」

トオルは煎餅に手をのばそうとしてやめた。

「トオル、私に興味が無いでしょ？」

「どうして？」

「だつて最近連絡しても全然返してこないし、会おうって言つても断わる日が多い」

思い当たる節はある。最近は色々と忙しかった。何より自分にとって大きな変化があり、それに夢中だった。楽しくて仕方が無かつた。

たし、彼女の優先順位は下がっていた。

「それは、色々とあつて。別に興味がないわけじゃないよ」

「じゃ私のこと好き？」

しばらく考える。好きって感情がどんなものだったか思い出すのに時間がかかるのだ。ずっと前、出会った頃には普通に分かっていた感情。それが思い出せない。

「好きだよ」

彼女は、トオルの顔を見て、テーブルに置かれた煎餅に手を伸ばす。

「もう答えは出てるみたいね」

そう言つて彼女は煎餅を持ったまま立ち上がる。トオルは自分の犯した失敗に気付く。それは果たして失敗だったのだろうか。自分は何で彼女とよりを戻そうとしているのか。変化が恐いからか。何かをなくすのが恐いからか。

「そんなことないよ、一緒にいよう」

彼女はトオルの声を聞こえないふりをして、

「形あるものはいずれ壊れる」

そう言つて、煎餅を指の間から落とした。煎餅は固いテーブルに当たり、テンテテテン、と柔らかな音を立てる。トオルはその煎餅が濡れ煎餅であつたことを思い出し、テーブルに落ちたそれに目を落とす。

ぱつぱつの悪そうな彼女は、

「例外もある」

と一言加えて、部屋を出て行った。

テーブルの上に落ちた濡れ煎餅だけが残つた。再び蝉の鳴き声と、エアコンの音が耳に入る。

よかつたのだろうか、悪かつたのだろうか、その答えは出るのだろうか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9263i/>

---

初音ミクの奔走

2010年10月11日03時23分発行